

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の 植林ボランティア活動報告書

山 本 健

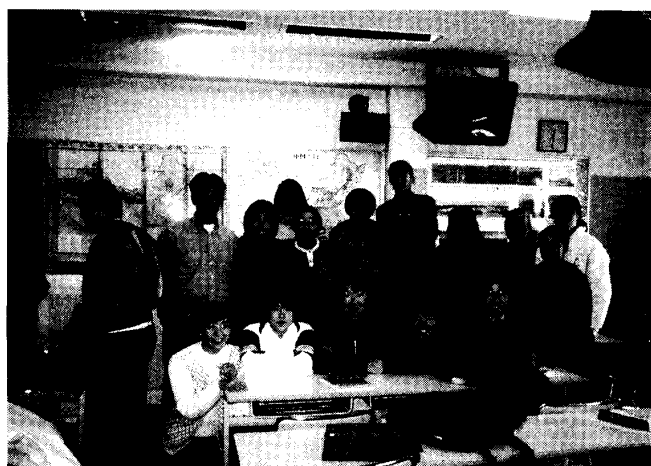
はじめに

敬愛大学国際学部の

砂漠植林ボランティア活動の始動

敬愛大学・国際学部(佐倉キャンパス)が毎年行っている中国・内蒙古自治区のクブチ沙漠（黄土高原の北端）でのボランティア活動は、国際学部の開設年度（1997年）に入学してきた学生たちの熱意に負う所が大きい。つまり、何らかのボランティアを是が非でもやりたいという意欲溢れる学生数人が、積極的に学「外」に飛び出し、様々な「外」のボランティアについての話を聞き、検討し、そして選んだ一つが「千葉県民一緑の協力隊」（代表：星恵美子）への参加であった。本学の「ボランティア活動」の授業（担当：山本健）に「ボランティア実践報告」月間⁽¹⁾を6月と11月に設け、学生たちの要望をも入れて、この「実践報告」の講師として星さんに来ていただいた（1997年6月6日）。彼女は、十数年に渡って中国内蒙古自治区の恩格貝（オンカクバイ）で植林ボランティアに打ち込んできた人物であり⁽²⁾、スライド、写真そして自分の体験談などを交えながら、中国での植林ボランティアの意義などを学生に具体的に語ってくれた。やはり十数年に渡る実践活動に裏打ちされた報

告内容は学生諸君を魅了したようで、この開設年度に、学生たちの4名（加島貴典、田島清美、庄司貴美子、榎本綾乃）が実際に内蒙古自治区のクブチ沙漠（恩格貝）での植林活動に参加した（私は所用で不参加）。この活動に参加した学生たちは植林活動に良い印象を持ったようで、大学に戻ってきた10月に学生仲間（私も含む）に自らの体験談を語ってくれた。このような学生自身の体験談が刺激剤となり、興味を抱いた更なる学生が沙漠緑化へ参加する、という学生たちの自発的な参加形態で、本学の中国砂漠植林ボランティア活動が始動し、2000年の今日まで4年間続いている。この点で、開設年度の学生有志が中国での沙漠植林ボランティア活動への道を切り開いたとも言えよう。その間にも、前述の星さんを介して、中国現地の恩格貝植林（沙漠緑化）基地の所長、遠山正瑛先生をお呼びして、公開講演会を催した（1997年12月5日）〔写真1〕。この講演会には、国際学部の近所の佐倉市（千葉県）山王地区の主婦たちも聴講に来ていた。そして、この講演が契機となって、翌'98年の内蒙古・恩格貝での植林ボランティアにその主婦も参加するなど、本学佐倉キャンパス近くの地域住民をも巻き込む、学生と一般人の混合形態での、開かれたボランティア活動が創り



〈写真1〉敬愛大学・講演会での遠山正瑛先生を囲んでの記念写真（97年12月5日撮影）

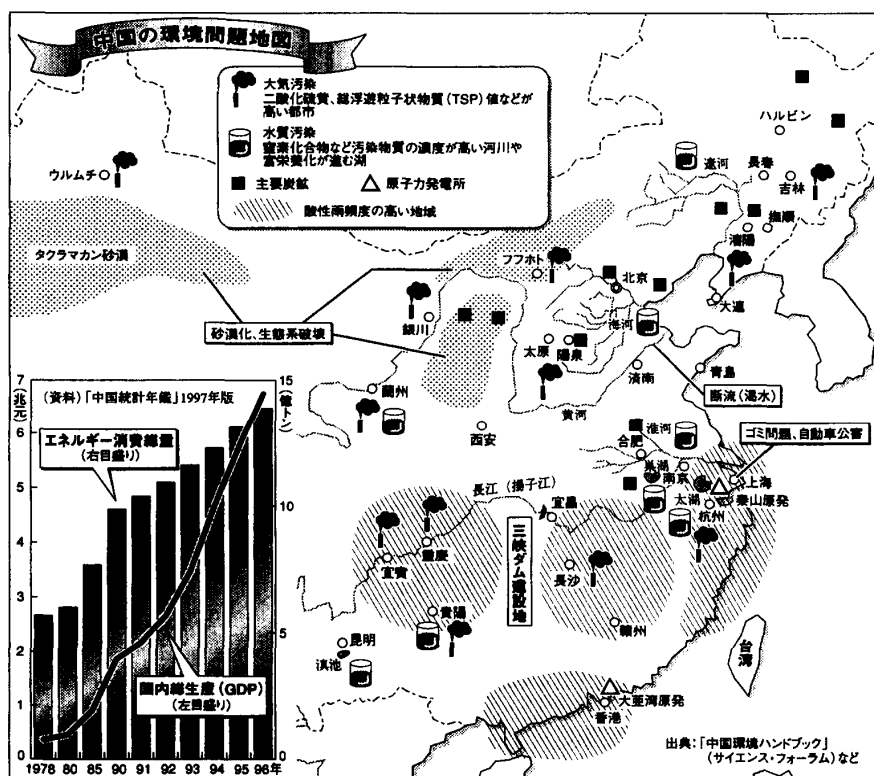
出された。特に、世代を異にする人と触れ合う機会の少ない今日の学生には、このような老・若混合グループ形態で始動した中国沙漠緑化ボランティア活動は、それ自体に老・若の協力関係を前提にしており、国の内外を問わず、生活環境を異にする人と人との繋がり意義を考える上で絶好の機

会を提供しているように思われる。次に、このような植林を必要とする中国の沙漠化の現状について言及したい。

1. 中国の環境問題の現状

まず、中国での環境問題の現状であるが、近年の中国は、かつての日本がそうであったように、「高度経済成長」を最優先した結果、環境破壊が顕在化し、産業公害、都市公害そして地球環境問題などあらゆる種類の環境問題に苦しんでいる。その実態は『読売新聞』が1998年6月11日から連載した「苦悩する大地—中国環境報告、part1～3」⁽³⁾から知ることができる〔図1〕。たとえば、中国ではエネルギー源の大半を石炭に、しかも質の良くない石炭に依存している。そのため、酸性雨

の原因とされるイオウ酸化物(SO_x)の年間排出量もかなりの量に達している（その年間排出量は1998年で日本の約30倍の2300万トンに相当）⁽⁴⁾。このような化石燃料による大気汚染、それから80年代から急増した中小工場「郷鎮企業」の未処理排水による水質汚染などの産業公害、また都市部での高度な消費生活から生じる自動車の排ガス、生活排水やゴミ問題それに水洗トイレの汚水などの都市公害、そして二酸化炭素(CO_2)による温暖化や沙漠化などの地球環境問題という、いわば三重苦の状態の中で、中国は苦しんで



〔図1〕中国の環境問題地図
典拠:『読売新聞』1998年6月11日の6面

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

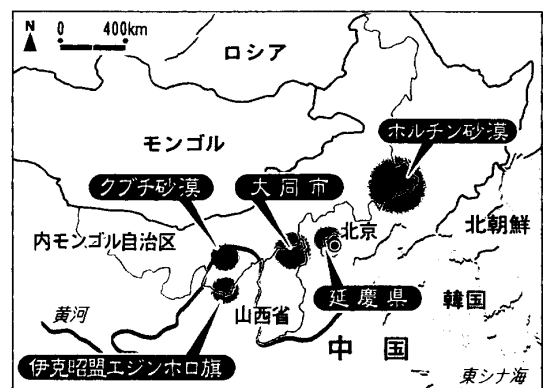
いる。

本稿で報告しようとする「砂漠緑化」という観点からは、同「環境報告part1」⑩の記事「砂漠化」⁽⁵⁾が参考になろう。この報告記事によると、「砂漠化」とは、それまで草原などのステップ (Steppe) だった土地が干ばつや人間活動の影響で土地が劣化し、生産力が減少することをいう。そして、中国では毎年、神奈川県面積 (2413km²) を上回る年2460km²の土地が砂漠化しており、このため、約300万トンの食糧減産を余儀なくされているという。なお、中国林業局によると、砂漠と砂漠化した乾燥地、塩害地などの総面積は日本の国土の約7倍に当たる262万2000km² (中国全土の27.3%) に達している。さらに、中国全国2万4千の小都市、総延長3千3百kmの鉄路、3万kmに上る道路が、砂にのみ込まれる危険にさらされている、という。

こうした砂漠化の中で、当該地住民の視点に立った問題点を挙げてみると、現地に居住する住民にとっての最大の心配事は、村や家の近くに迫っている流動砂丘である。高さ10m、横幅100mに及ぶ「くの字」形に広がる砂山は年々成長している。このため、年々草地は減少し、住民は毛皮やカシミアなどの高く売れる高品種の羊や山羊の飼養に切り替えている。同時に、流動砂丘の固定化のために、植林が行われている。ただし開放・改革以降、「豊かな」消費生活を知った中国では、植林の意義 (砂の固定化への有効性) は認めながらも、その「経済効果の低さ」が指摘され、生態環境の保全よりも砂漠開発に力点が置かれているのが現状である。

これに対して、中国政府は1999年に荒れた自然環境を回復させ、持続可能な発展をめざす「全

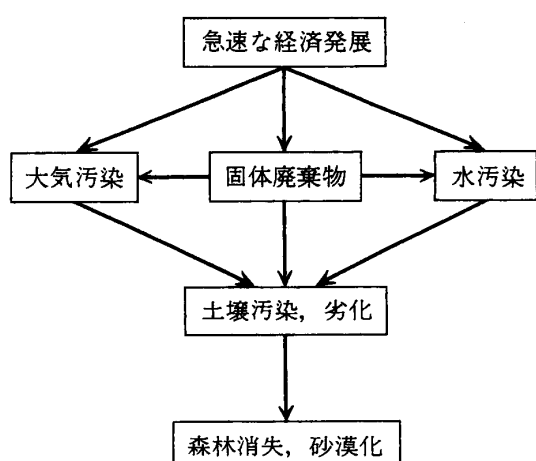
国生態環境建設計画」を策定し、深刻化した土壌流出 (国土の38%)、砂漠化 (国土の27%) など国土荒廃を2050年までに改善することを決定している⁽⁶⁾。その計画内容は具体的に、①2010年までの第1段階で、揚子江・黄河の上・中流域での表土流失を阻止するために植林活動を (流失した土地60万km²と砂漠化した土地22万km²の回復そして森林地39万km²の造成)、②2030年までの第2段階で、砂漠化した土地への造林 (46万km²) と土壌流出地域の6割以上と砂漠化した土地40万km²の回復を、そして③2050年までの第3段階で、土壌流出地域の回復作業の完了と植林可能な土地の緑化および荒れた草原の全面回復を行うというものである。このために、中国国



〔図2〕中国での日本のNGOの環境緑化対象地
典拠：「21世紀へ、地球みらい」
（「福島民友」2000年1月12日）

民は毎年1人当たり3－5本の植林義務を負うことになる。このような植林運動には、すでに日本の十数にのぼる民間団体も協力している〔図2〕。日本政府も「小淵基金」として中国緑化事業に90億円拠出することを決定しているし、経団連もCO₂の排出権取り引きをにらみつつ、積極的に対応している⁽⁷⁾。

このような環境汚染の関係を純理論的に図示すると〔図3〕のようになる。この関係を定方氏は



〔図3〕中国の環境汚染の構造
典拠：定方正毅「中国で環境問題にとりくむ」図2-9

人文・社会学的な視点から明らかにしている〔図4〕。同氏によれば、中国における環境破壊は、人口の増加と貧困化が契機となり、都市、農村それに森林との共生関係の崩壊の結果である、という⁽⁸⁾。すなわち、人口の急増や農地の劣化による農村の貧困化が進むと、都市への人口流出が生じ、都市人口が膨れ上がる。その結果、都市のスラム化が進むと同時に、都市の環境汚染（大気・水）が進行し、酸性雨等により都市周辺の農地は一層劣化し、また宅地化により農地・森林も消失する。他方、農村では土壌の劣化による農業生産性の低下を補うべく、周辺森林の農地化が進む。その結果、森林消失に伴う（開墾農地の）表土流出が進行する。またこれを補おうとして周辺森林の伐採や農地化がますます進むという悪循環に陥る。こうして、都市と農村、および農村と森林の間の貧困—環境汚染の連鎖サイクルによって、都市、農村、森林間の共生関係が崩れ、農村を中心に貧困化と環境破壊が同時に進行することになる。

以上のことから、私たち外国人（中国人から見て）にも手っとり早くできる協力は、まず農地の劣化ないし流砂による消失に陥っている農村に赴

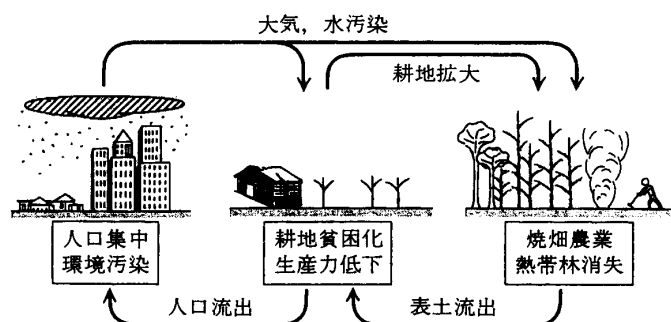
き、そこでの流砂の固定化であり、そのための植林作業のお手伝いであろう。そして、そのお手伝いを通して、環境を守ろうとする意気込みを現地人に見せることで、現地人の「ヤル気」を引き出すことである。そのためにも、現地人と「触れ合う」機会を多く持つことが必要であろう。

次に、私たちが中国・内蒙古自治区の恩格貝での植林作業の実体験を述べてみる。

2. 中国内モンゴ・恩格貝（クフチ沙漠）での植林活動

（1）内モンゴ・包頭市および恩格貝（クフチ沙漠）地方について

植林地のある恩格貝（おんかくばい）は、内蒙古自治区・伊克昭盟（いくしょうめい）達拉特旗（だらとき）烏蘭郷（うらんごう）に位置する〔図5〕。北京からは鉄道にしる飛行機にしる一旦、恩格貝の玄関口たる包頭市で下車する必要がある。鉄道の場合は、北京～包頭間の京包線（鉄道距離832km）を寝台急行列車で約14時間。このコースを利用した1998年の場合は北京駅を午後9時10分に出発し、翌日の午前11時30分頃に到着した。飛行機の場合、所要時間は約80分（2



〔図4〕貧困—環境汚染の連鎖スタイル
典拠：定方正毅「中国で環境問題にとりくむ」図2-10

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

000年)。これが首都北京と包頭市（パオトウ）の距離である。

ところで包頭市は17世紀の清朝時代に開拓され、その地名は「鹿のいる場所」を意味するモンゴル語に由来する。この事から判断すると、この包頭はかつて鹿が群れるほど水と草原に恵まれた地域であったと思われる。また人口も1950年代の初め（新生中国時）には僅かに9万人であったが、41年後の1991年には180万人に急増している。この人口増加の背景には、中国政府による工業化政策があった。事実、包頭市には製鉄、機械などの総合鉄鋼コンビナートが設置され、内蒙古の重工業都市に生まれ変わった。これは、近隣で採掘される鉄鉱石の他に、石炭が豊富に存在する事にも起因する。特に、石炭は包頭市の南約95kmにある東勝市一帯の神府東勝炭田（または東勝神木炭田）からトラックなどで搬入されている。この炭田の面積は31200km²に及び、採炭量も2600万トンに達し、さらにその埋蔵量も中国全土の総埋蔵量の25%を占める程である。このような重工業都市の常として、スモッグ（大気汚染）が深刻である。

これと並んで侮れない「自然災害」が、冬から早春にかけて、北西のモンゴル国境のゴビ砂漠くゴビとはモンゴル語で小さい石ころ（礫）を意味する一般名称（普通名詞）であり、固有名詞ではないから、包頭市の北側に連なる陰山（インシャン）山脈を越えて吹き下ろす黄風（ホアンヘン）と呼ぶ北西の砂嵐である。この砂嵐は激しく、市民はストッキングの様な物を頭からかぶって街に出る、と言われる程である。これに対して、市民たちは郊外の北側山麓に大規模な防風林帯を設けて対応しようとしている。

この包頭市から植林基地のある恩格貝までは約78km。バスで約2時間の距離である。すなわち、包頭市の南に架かる黄河大橋（東勝市へ行く幹線）を渡り、その途中で西へ。そして黄河に並行して有料舗装道路を走る。“昭君墓”部落の近くで方向を南へ、まもなく石灰石の採掘場が道路わきに見える。さらに3ヶ所の橋のない川を水しぶきをあげて川底を渡る（'98年と'99年）。ただし、2000年の場合には、2008年のオリンピック招致を意識したインフラ整備のためか、2ヶ所には橋が架かっていた。沙漠に近づくにつれ、部落の家々は日干しレンガを積み上げた住居が多くなる。屋根の上では収穫したトウモロコシやヒマワリなどを乾燥させていた。途中で舗装道路が途切れ、未舗装道路（砂利道）をもうもうと土煙をあげながら、やがて標高1130mに位置する恩格貝へ到着する。遠くには砂丘が連なり、また湿度が10%以下で、昼夜の温度差が約20度にも達する過酷な沙漠地帯への到着である。この恩格貝は日本の青森県弘前市とほぼ同じ緯度に位置する。

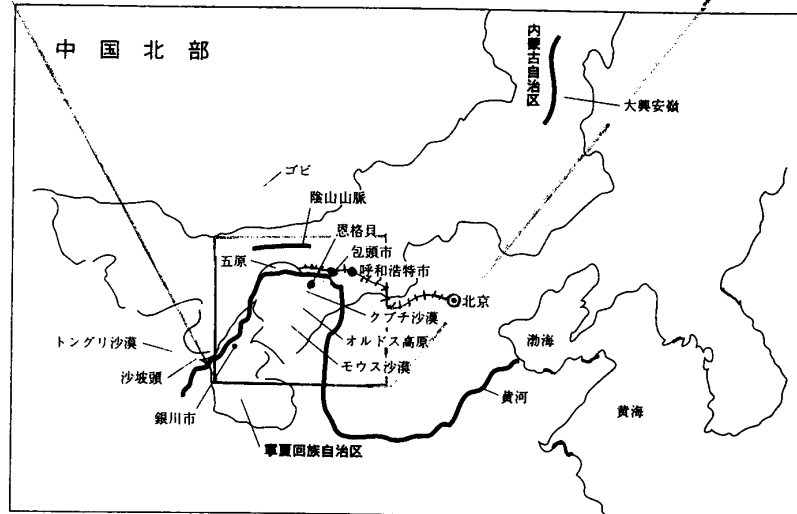
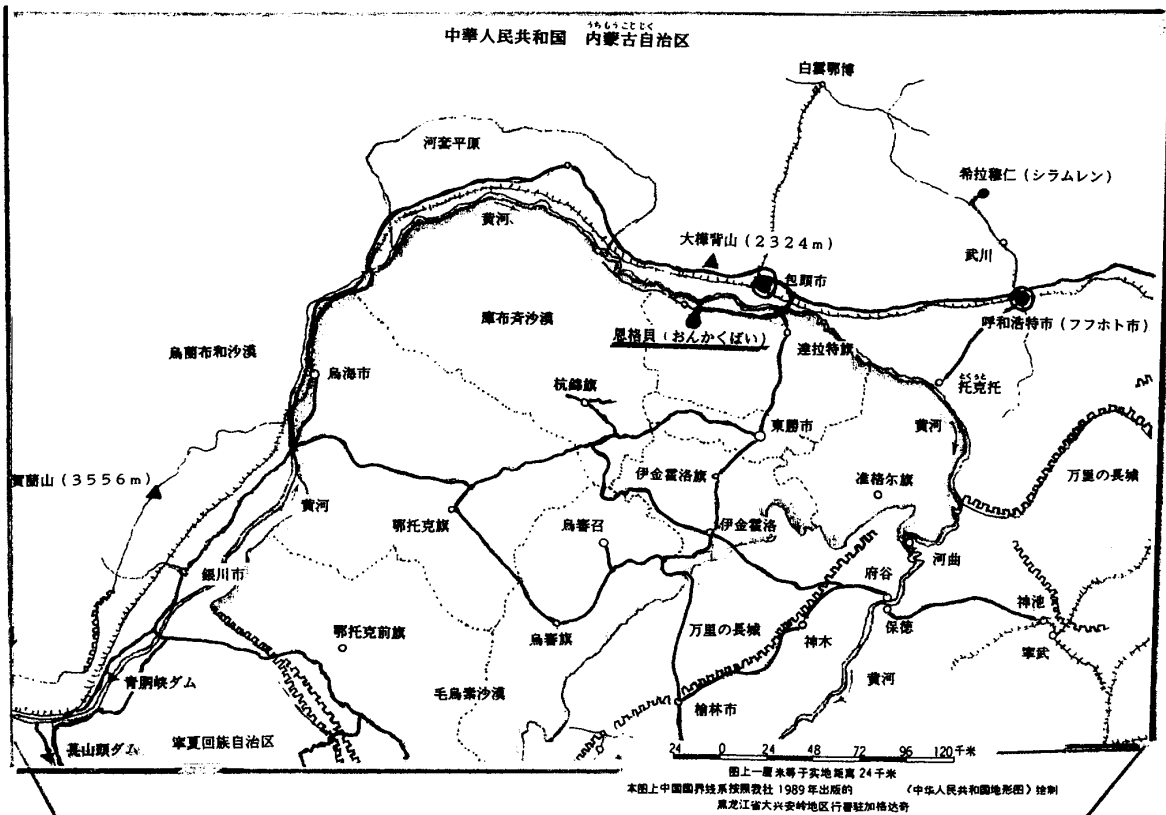
恩格貝は、黄河の流れで囲まれたオルドス高原の北端に位置している。すなわち、オルドス高原は、周知の如く、南の黄土高原さらにはモウス（毛烏素）沙漠に、また北のクブチ（庫布齊）沙漠へと続いている。したがって、そのクブチ沙漠の北端に恩格貝がある、といったほうが良いであろう〔図5〕。

（2）恩格貝基地について

恩格貝の雨量は年間平均約250ミリで、ほとんどが夏に集中して降る。夏の気温は昼（37度）夜（15度）の温度差が激しく、湿度は10%以下である。また冬は零下25度にまで達し、冬か

中華人民共和国 内蒙古自治区

伊克昭盟



〔図 5〕中国北部の見取り図
典拠：山本茂『緑のボランティア・蒙古沙漠をゆく』

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

ら春にかけて北西の強い風が吹きつける。この季節はそのため、砂塵が舞い上がり、砂丘が移動する時期でもある。周辺の民家の間取りは一部屋で、日干しレンガ造りの住居である。彼らの生計は、この緑化基地で働く他に、カシミヤを採る山羊の放牧が主なものである。このように恩格貝緑化基地は過酷な沙漠地帯の真ん中に浮かんでいる緑化前線基地であるといえる。

ところで、この緑化基地の宿泊所は、三井物産・ユニチカと中国のカシミヤ合弁会社（中華絨山羊発展研究中心）が造った建物を、1993年に中国側が改築および増築して、ベット、水洗トイレ、シャワー付きの2人部屋を基本とする平屋造りである。収容人員は約90人である。宿舎の入り口には、朱塗りの派手な中国特有の門があり、しかも電灯が灯るために、夜などは周辺住民が涼を求めて集まり、11時頃まで談笑している。宿舎の周辺には、現地住民の住居の他に、事務所、機械器具倉庫、石炭倉庫、農産物貯蔵庫、井戸、水タンク、ポンプ室、飲料水ペットボトル工場、果樹園、花畑、農園、桑畑、人口池それに記念植樹地などがある。宿舎の北側には、ドイツのシーメンス社製の大型風力発電装置がある。ただし、これは1993年に設置されたが、充電用のバッテリーがないので、充電は不可能である。また宿舎の東側には3階建てのホテルが建設中である（2000年9月現在）。

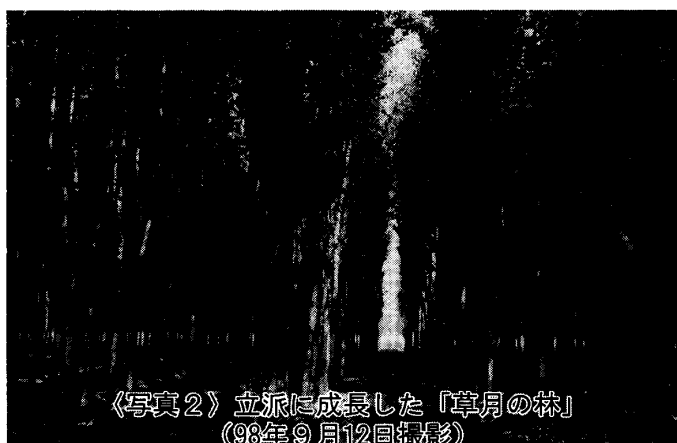
飲料水ペットボトル工場の源水は、宿舎の南東約7kmのところで湧きだしている陰山山脈の伏流水である。工場はここからパイプで水を引き、ペットボトルに詰め込む作業場である。この商品名は「恩格貝－沙漠泉」（緑色食品）である。また宿舎の南側にある果樹園にはブドウ、リンゴ、アンズ

などが栽培されている。同じく南西に設けられた花畑には、コスモス、サルビア、アスター、矢車草などの種を採取する目的で栽培されている。採取した種は袋詰めにして日本で販売されている。さらに農場では、トウモロコシ、ジャガイモ、粟などが栽培されている。肥料は「ダチョウの糞」や堆肥、草木灰、そして現地のダムの崖から草炭（ピートモス／peatmoss）を採取して、アルカリ土壌の改良に使用している。トウモロコシやヒマワリはその収穫後に枯れた茎が住宅周辺の野菜畑や鶏小屋などの強風よけや飛砂よけの外柵に使用できるので、重宝されている。なお、収穫したトウモロコシやヒマワリは屋根の上に乗せて乾燥させる。そのため、収穫の季節には、各家々の屋根は黄色一色になり壮観である。

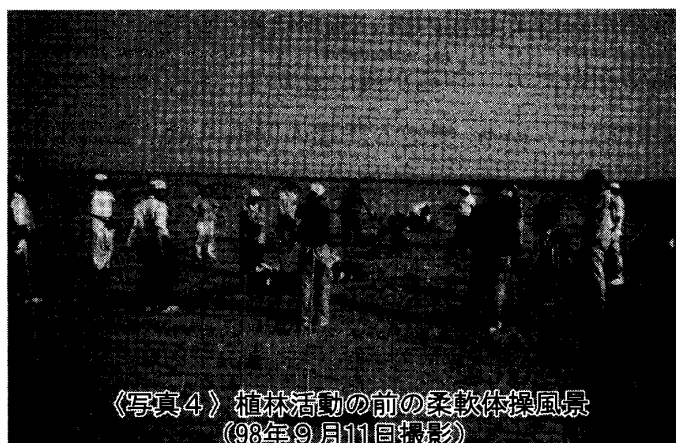
（3）植林作業について

恩格貝では、植林参加者たちが、上記した過酷な気候を考慮して、1日の沙漠観察（ウォッチング）を介して沙漠を身近かなものとし、その後、一般に2～3日の植林作業という実践活動と、さらに遠山正瑛先生の沙漠講座を通して沙漠緑化の意義を再認識する、システムになっている。

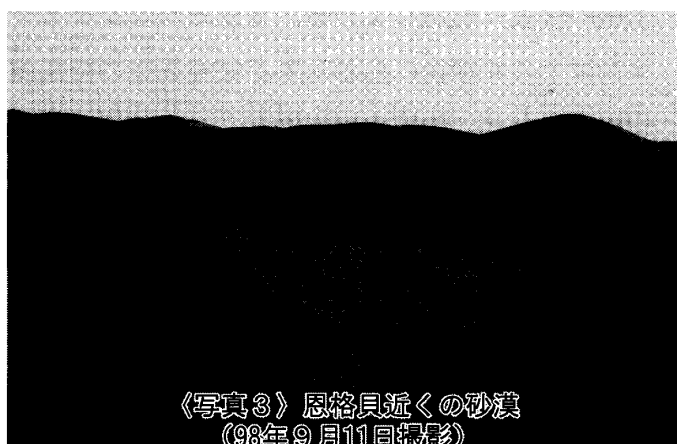
ところで、植林に使用される木は「新疆ポプラ」を主に、柳、榆などである。その苗木は高さ2mの2～3年ものである。また活着率が良い移植方式が採用されている。作業は①深さ50～60cm、直径30～40cmの穴を掘り、枝を切り落とした苗木を垂直に穴にいれ、③掘り出した砂で深さの80%を埋め戻し踏み固める。④バケツなどで灌水し、その後⑤灌水した水分の蒸発を防ぐために、残りの20%を砂で埋める。植林作業は基本的にこの①～⑤の繰り返しである。灌水用の水源は、



《写真2》立派に成長した「草月の林」
(98年9月12日撮影)



《写真4》植林活動の前の柔軟体操風景
(98年9月11日撮影)



《写真3》恩格貝近くの砂漠
(98年9月11日撮影)



《写真5》植林する苗木の穴掘り風景
(98年9月11日撮影)



《写真6》掘った穴に苗木をいれる
(98年9月11日撮影)



《写真7》布バケツリレーによる灌水作業
(98年9月11日撮影)



《写真8》穴に入れた誘い水
(98年9月11日撮影)

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書



《写真9》「草月の林」で寛ぐ現地人スタッフ
(98年9月11日撮影)



《写真13》蒲圪ト（ブカボ）小学校での歓迎の1コマ
(98年9月13日撮影)



《写真10》砂漠観光に来た中国人の植林参加風景
(98年9月12日撮影)



《写真14》川からプレートを渡し当て、得意満面の学生たち
(99年9月12日撮影)



《写真11》砂漠観光に来た中国人たちとの記念撮影
(98年9月12日撮影)



《写真15》砂漠の山を自由になげ下る学生たち
(99年9月12日撮影)



《写真12》1997年度に植林した「わが子」との体面
(98年9月12日撮影)



《写真16》砂丘の頂上から底を写す
(99年9月12日撮影)



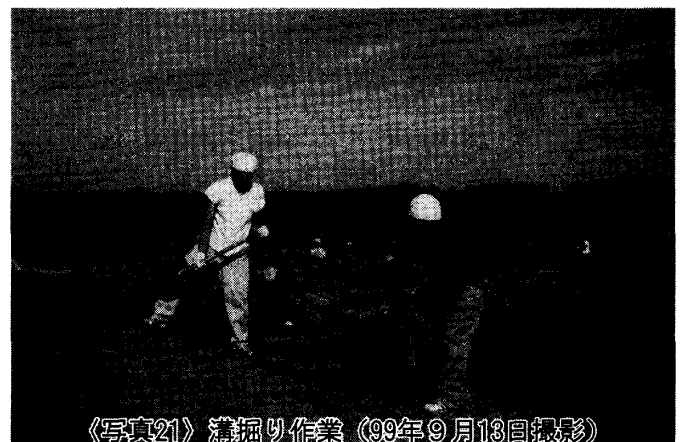
《写真17》砂漠ウォッチングでの記念撮影
(99年9月12日撮影)



《写真20》植林地の整備作業
(99年9月13日撮影)



《写真18》99年度新人の「デビュー」姿
(99年9月13日撮影)



《写真21》溝掘り作業 (99年9月13日撮影)



《写真22》柵造り作業 (99年9月13日撮影)



《写真19》草方格造りの第一作業 (長い茎探し)
(99年9月13日撮影)



《写真23》「肥料」(羊の糞) 蒔き作業
(99年9月13日撮影)

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書



《写真24》松を植樹（99年9月13日撮影）



《写真28》砂漠の寒村：徳生城の風景
（99年9月14日撮影）



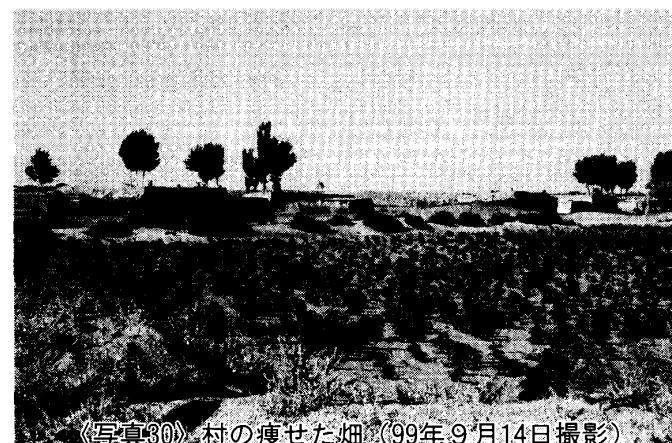
《写真25》バケツリレーによる灌水作業
（99年9月13日撮影）



《写真29》回バに牽かれる荷車
（99年9月14日撮影）



《写真26》雷雨後に再開した作業風景
（99年9月13日撮影）



《写真30》村の痩せた畑（99年9月14日撮影）



《写真27》作業現場での集合写真
（99年9月13日撮影）



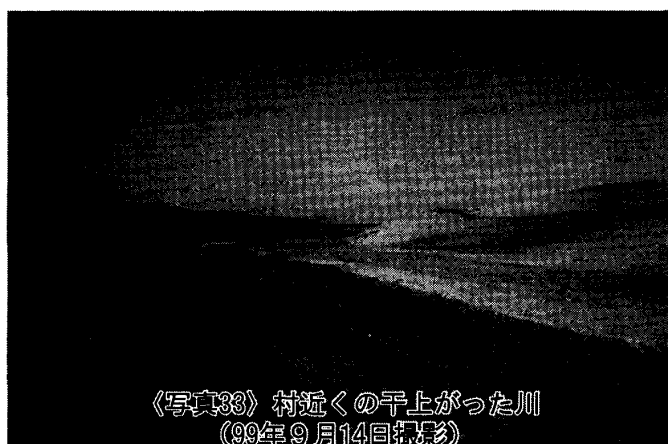
《写真31》村での山羊の飼育
（99年9月14日撮影）



《写真32》村人との記念写真
(99年9月14日撮影)



《写真36》宿亥図里郷での植林現場
(00年9月9日撮影)



《写真33》村近くの干上がった川
(99年9月14日撮影)



《写真35》宿亥図里郷での集合写真
(00年9月9日撮影)



《写真34》遠山正瑛先生を囲んでの記念撮影
(99年9月14日撮影)



《写真38》恩格貝近くでの植林風景
(00年9月13日撮影)

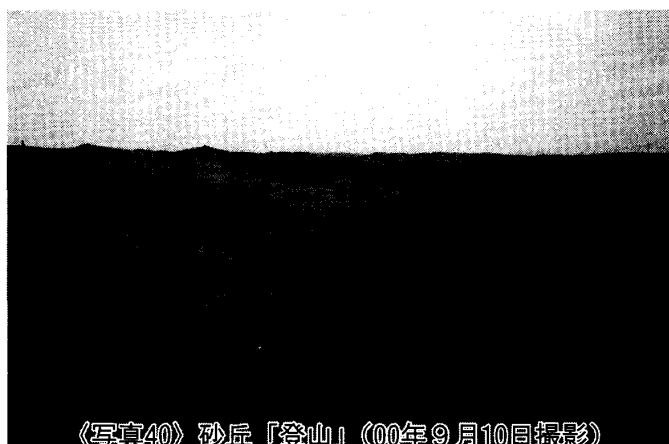


《写真35》宿亥図里郷の役所の入り口の前
(00年9月9日撮影)



《写真39》流砂で「崩壊」した草方格
(00年9月10日撮影)

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書



《写真40》砂丘「登山」(00年9月10日撮影)



《写真42》五里明里の林(00年9月10日撮影)



《写真41》田島清美さんの「分身」の成長姿
(00年9月10日撮影)



《写真43》現地人と一緒に「大根」を掘る星さん
(00年9月10日撮影)



《写真44》作業現場での集合写真
(00年9月10日撮影)

人口池や水路からエンジンポンプを使用して、植林地の近くまで送水される。苗木は現地で買い上げる分と緑化基地自体の自給分とがある。後者の育苗地は宿舎の南西方向の第二ダム中流左岸にあ

る。苗木はポプラの成木の枝を短く切り、これを砂地に挿し木する。約3年間育てて苗木にする。掘り出した苗木は水分の蒸発を少しでも防ぐために、苗木の枝や葉を剪定除去する。その後、植え

るまでの間、苗木の根を水溜まりなどに浸したり、
またシートを上から掛けて養生させておく。

以下では、その具体的な活動を紹介してみたい。

3. 敬愛大学・国際学部学生たちの 沙漠植林活動

以下では、敬愛大学・国際学部に所属する学生たちも参加した「緑の協力隊」での活動を、学生たちを中心に、しかも私のメモと写真などを基にして記す。

（A）1998年－第3次千葉県民・緑の協力隊への参加メモより。

1998年の旅は、9月6日から15日にわたり、内蒙古植林を中心に、上海・南京そして北京の名所旧跡をも見学するスケジュールで行われた。

9月10日（第5日）

〔恩格貝にて植林活動－第1日目〕

今日から本格的な植林活動の開始。朝食後に、まず沙漠の暑さに慣れるために、体験ツアーに出かける。日中の温度は34～35度。今年の日本では味わえなかった暑さである。また沙漠を歩くことに慣れていないせいか、非常に疲れる。それでも、沙漠の中のオアシスに湧く水は、冷たく、また美味しい。中国に来て、初めて生水を飲んだ。まさに絶品の味がした。水道水は改めてそのまづさを実感する。沙漠の中に植林したポプラの木は、洪水などで毎年20本の割合で流されているそう。特に、雨期（7月中旬～8月下旬）の 때가顕著とのこと。1994年は降水量が多く、1万5千本ものポプラが流失した。本当に残念である。日本沙漠緑化実践協会から派遣された現地スタッフの大滝さんの話しによると、ここ2～3日は気温が異常に高い（おそらく35度くらいか）そうだが、沙漠に立っていると、不思議と汗をかいているという実感が無い。それほど身体からの汗の蒸発量が多いということであろう。事実、マイク

ロ・バスに乗り込むと、風が無く、蒸発量が減るせいか、汗が吹き出してくる。確かに、沙漠では外の方が気持ちが良いのである。

また、今年の洪水で溜まった水を利用すべく、人工池を作って水を溜め、使用している。沙漠の中に溜め池とは、なんとも不思議な気がする。また少し成長したホプラの木の枝刈りを見たが、中国人が使用している大鎌は下から突き上げて枝を切ると言うもので、日本のように上から鉋（なた）を振り下ろす、というものではない。まったく対照的な枝刈り技術である。また中国の器具は先の刃の部分が交換可能なのである。切り落とした小枝は燃料用に、またホプラの葉は家畜（山羊が圧倒的に多く、次が鶏、そして豚など。牛は草が無いためにほとんど居ない）の冬の飼料にするとのこと。すべて無駄なく利用している。

最後に、5年で立派に生育した「草月の林」〔写真2〕を見学した。ここは洪水で流れてきた肥沃な土に植林したため、短期間でこんもりとした林になった、とのこと。草月流の家元が砂漠緑化実践協会に寄付したお金で植林したため、「草月の林」という呼び名が冠されたそうである。

昼食のため、研究所に戻る。午前中の砂漠見学〔写真3〕で相当の疲れを覚えた。昼休み（1～3時）に学生たちの何人かが売店の孟凡梅さん（モンゴル人で中国語と日本語が話せる）を取り囲んで中国語講座よろしく直接指導による勉強会をしていた（千葉大と敬愛大の女子学生）。私は暑いので日陰のセメント広場で横になって空を見上げていた。そして3時に皆でお汁粉を飲んで気合を入れ、いざ出発と言うときに、現地スタッフから砂嵐が来そうなので、植林活動を中止する旨、言い渡される。そのため明日、植林する予定地をバス

で下見し、その後、ダチョウの飼育場を訪問することになった。

なおもう一人の女性現地スタッフから聞いた話しでは、この研究所にある 2 基の風力発電用の器具（プロペラなど）は、ドイツ人隊がここで風力発電を計画して作った物だそうだが、途中で断念して帰国してしまった。そのため、蓄電装置がなく、それ故に風力発電機能を備えていないとのこと。しかし、遠くから恩格貝の存在を示す、いわば「沙漠の海」の灯台の役割を果たしており、それなりの役割を立派に果たしているように思われた。

この日の昼休み時間に安田さんとの会話を介して二三の疑問が解決した。それは、4 日目に〔北京から包頭までの列車から〕見たビニール・ハウスでは何を作っているのかという疑問であった。それは中国人が好きなキュウリの栽培であった。この地方では、また、リンゴやナシは小型のものが主流であり、スイカやブドウは安くて美味しいとのこと。中国では冷凍技術が遅れているせいもあって、すべて旬の物しかないとのこと。実に羨ましい限りである。また当地の天候は一般に、4～5 月頃から北西風が吹き出す。6 月が一番暑く（36 度）、7～8 月が雨期。南からの風はシトシト雨を、東ないし北からの強風は常に豪雨を運んでくる。今年は 4～5 月頃に風が吹かず、7 月にも雨は僅かしか降らず、今年は少し異常な天候であると聞かされた。

夕食後、一人の若い中国人を紹介される。彼の名はトウトウ君と言う。彼はフフホトの大学で日本文学を専攻した卒業生で、大学では 4 年間、日本留学を体験した中国人の先生から日本語を学んだとのこと。まだ日本に行ったことはないが、日本

人が多くやって来るこの恩格貝の研究所で、日本語の練習をさせてもらっているとのこと。将来は日本語の教師になりたいそうだ。一般に外国人が言及するように、彼もまた「日本語にはひらがな、カタカナ、漢字、外来語などがあって、大変難しい。外来語に至っては、中国人にはまるで英語の勉強を強いられる程です」とのこと。午後 10 時頃まで研究所の門のベンチで雑談を交わして、別れた。

9 月 11 日（第 6 日）

〔恩格貝にて植林活動―第 2 日目〕

今日から研究所の南に位置する沙漠地帯で植林活動に取りかかる〔写真 4〕。炎天下の中での作業である。全員がスコップを持って一列に並び、ロープに付いている印の所に穴を掘る〔写真 5〕。穴の深さは約 70 cm（スコップの 6～7 割）。乾いた砂が絶えず掘った穴の中に流れ落ちる。蟻地獄とはこのことか。そして掘り終えたら、ポプラの苗木をさして〔写真 6〕、再度その穴の位置が正確かどうかを確認した後、砂を埋め戻す。そして足で踏み固めて、終了である。―（ただし、埋め戻す砂の量は 8 割程度で良いとのこと。後で水をやるので。）―上記の行為を 5 本目まで繰り返し、その後 5 本まとめてバケツリレーによって水を流し込む〔写真 7〕。―この水は地下の湿った土から水を根元に上げるための誘い水である〔写真 8〕。―そして、以上の単純な作業を淡々と繰り返していく。太陽の強い日差し、1100 m という準高地故に、急激な運動（作業）は避けなければならない。

昼、「草月の林」に行って、昼食を取る。お皿に、ご飯を盛り、そして温かい「大塚のボンカレー」をかけ、ウィンナー半切れ、塩づけキャベツの千

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

切り、そして味噌汁である。沙漠という状況を考えれば、これはこれで美味しいものである。そしてその後に問題のスイカが出た。私はこのスイカを4切れ食べた。そして、午後の仕事までの約2時間は、林の中の日陰でお昼寝タイム。各人が好きな場所に腰を下ろして、涼む。涼しい風が吹き込んで、まことに気持ちが良い。現地中国人のスタッフも寛ぐ〔写真9〕。

－（「草月の林」に戻ってきた時、和服の日本人女性が「林」に来ていた。彼女は国士館大学講師の堀江恭子さんで、包頭大学での中国文学研究会（彼女は説話文学が専攻）に出席した後、植林活動を見学に来たとのこと。）－

午後の作業（3～5時）が開始。とにかく暑い。4時頃に休憩をはさんだ。ここで、再び、スイカが登場した。ここでも私はスイカにパクついた。しかし、このスイカは少し完熟し過ぎ（『腐り気味』）であった。しかし、私は「まっ、いいか」と軽い気持ちで食べてしまった。これが見事に大当たり！この日の夜から下痢状態が始まった。

夕食後に現地指導員の安田さんの案内で、現地のモンゴル人農民の住宅を2軒訪ねた。一軒目は研究所の園芸労働者をまとめる人夫頭の家である。ここは比較的大きく、3部屋あった。一つは居間。ソファが1つ、イスが3脚、そしてテレビとラジカセがそれぞれ1台、部屋にあった。二つ目はその奥にあり、台所と寝室を兼ねている。もう一つは従兄弟が使っている部屋である。白湯を勧められ、これにTパックのお茶を入れて飲んだ。旦那さんが不在で15分ぐらい待ったが、帰りそうもないのでここを辞し、2軒目の家に連れていってもらった。この家は1部屋だけの、当地では典型的な家屋であった。部屋の1/3が寝室兼客間であり、

1/3が台所、残りの1/3が土間という作りである。ここには、テレビがあり、今中国でヒットしている恋愛ドラマが放映されていた。これを見ようと、テレビを持っていない近所の人達も来ていた。このドラマの内容は、地主に囲われている4人の女性間の争いを中心とした物語であったように私には思われた。安田さんに言わせれば、若い人はこのドラマをみて「恋愛」とはどういうものなのか、を学習する絶好の機会なのだそう。確かに、当地には人間が居ないので、恋愛もままならないように感じられる。この2軒目でも白湯のもてなしを受けた。私はこれら2軒で出された「お茶」を2杯程飲んで、寄宿舍に帰った。どうも、この頃から少し腹の調子が本格的におかしくなってきたようだ。そのまま就寝したが、真夜中の2時頃から腹痛と下痢に見舞われた。しかも同室の加島君も同じらしく、二人して交互に約30～40分置きにトイレに駆け込むはめになる。しかもこの状態が朝まで続く。－後日、ベテランの星さんに話したら、辺境に来た初心者が受ける1種の「洗礼」みたいなものですとのこと。

9月12日（第7日）

〔恩格貝にて植林活動－第3日目〕

朝になっても、下痢は止まらず。朝食をパス。カロリーメイトとポカリを飲む生活が始まる。しかし8時半からの植林活動へは一応、参加した。しかし、現場に行ったものの作業にならず、ロープによる穴の位置づけ作業という軽作業を5～6回したが、それでも体調が思わしくなく、私と千葉大生の上地さんの2人は朝から「草月の林」に行って休むことにした。そのため、10～12時は横になっていた。そして昼食時に皆が「林」に

戻って来て、昼食を美味しくうけとらえていた時も、ほとんど何も食べず（カロリーメイトとポカリのみ）にいた。午前中、仕事をせず、身体を動かしていなかったためか、今日の「草月の林」に吹く風は、前日に感じた涼しい、爽快な風ではなく、むしろ体温を奪われる「寒い風」という感じであった。

午後は、少し楽になったせいもあって、作業に参加した。しかしその作業とはいっても重労働の穴掘りは遠慮させてもらい、軽作業の網はりなどであった。そんな時に、包頭市から来た砂漠観光の中国人一行（男－2人、女－3人、子供－1人）が私達の植林現場にさしかかった。彼らは植林作業に関心を持っているらしく、声をかけたら、中国人たちも気軽に、私達の提案に乗ってきて、一緒に作業に加わった。もちろん、彼らは普通の靴を履き、女性はスカート姿であったが、服装を気にせず作業をしてくれた〔写真10〕。この時こそ、中国語を話せる是洞さん（敬愛大学・国際学部のある山王地区の地域住民）が大活躍したのは言うまでもない。もちろん、中国人のガイド高さんが「この作業が終了したら、皆で記念写真を撮りましょう」と話をつけておいたそうではあるが。そして作業の完了後（2日間で合計、639本の植林）、ラオスから参加した平田さんが「日中交友（好の誤り。ご愛嬌！）・・・」と記した紙を取り出し、前列の人びとに持たせて記念写真を撮った〔写真11〕。散会した中国人たちは徒歩で恩格貝の方へ戻っていった。私達はスコップなどの後片付けをして、研究所に戻った。その後、記念植樹をした。もちろん、自分の名前を記したネーム・プレートをつけて。割り当てられた所は、土が非常に固く、育つかどうかは不明である。－（なお、昨年、植

林した場所にも行ったが、幸運なことに昨年記したネーム・プレートが残っていた。各人の名前の他に、我が「敬愛大学」の名前もシッカリと残っていた〔写真12〕。）－現場から戻って、私は夜のキャンプファイアーには参加せず、また夕食をも食べずに早く寝た。加島君は夕食を食べ、かつキャンプにも出席したらしく、この夜も30分間隔でトイレに駆け込んでいたようである。

9月13日（第8日）

〔恩格貝から包頭市へ移動、そして夜行列車で北京へ〕

午前中の沙漠ウォッチング（五里明砂）をパスして、宿舎に残って、体調を崩した前2日分〔第6、7日目〕の日記を書いた。今朝、現地スタッフの安田さんから現地の菓をもらい、ダメ押しにと飲む。これで大丈夫か。この午前中の時間を利用して、改めて沙漠研究所の付近を一人で散策する。そして気に入った風景を撮影した。沙漠の中に出来た農園、ブドウ畑、研究所の全景、そして現地にあるモンゴル人のパオなど。そんなこんなで楽しい時間を過ごしていたのが、沙漠ウォッチングに行っていた仲間が12時頃に戻って来た。そして、恩格貝を立て、途中、蒲吃ト（ブカボ）小学校に立ち寄り、日本から持ってきた文房具を寄贈した。日曜日にもかかわらず、小学生たちが学校に集まり、私たちを「熱烈歓迎」の儀式でもって歓迎してくれた〔写真13〕。すなわち、小学生たちが学校の門から二列縦隊になって「歓迎の声」を上げる中を、私たちはブラスバンド隊（といっても、太鼓、ドラと金管楽器などの、いかにも中国らしい構成）の後につづいた。小学生たちの衣服は、やはり共産主義国の農村に特有な赤系統の色の上着やズボンが多く、非常にカラフルであっ

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

た。私たちは、とある教室に入って校長先生から感謝の言葉を受けた。またお茶のかわりに缶ジュースを頂いた。缶ジュースが極めて高価（一本約4元（日本円で約60円））であるということを知っているだけに、恐縮した。若い学生たちは小学生たちの輪の中に入って、ボール遊び（サッカーやバスケットなど）をしたり、また年配者たち（女性）はシリトリ遊びなどを教えていた。

この小学校には約30分ぐらい滞在した後、一路、包頭市へ。帰路は、一度往路で見ている風景だけに、写真を撮るポイントを知ってはいたが、バスが動いているため、なかなか難しい。途中、王昭君の墓を遠方から見た。遠くから眺めたせいか、小さな塚といった感じであった。包頭市に到着し、前〔第4日目〕と同じ飯店で包頭市人民政府の外事部（対外交渉部）の役人〔副主任：蘇陽さんと名刺を交換〕に会った。彼の関心は公害問題〔特に、同市は石炭燃焼による二酸化イオウ（ SO_2 ）の問題〕にあるようだ。昼食後、包頭市内にあるモンゴル人が経営する遊園地に行く。学生たちはポニーに乗った。しかし、馬は直ぐに、学生たちが乗馬未経験者だと見抜いてしまい、なめきって、途中から歩きだす始末であった。さすがに、現地のガイドさんが乗ったら、馬も必死で走り、あっという間に1周して出発点に戻ってきた。また同行の中学生たちは遊園地にいるラクダに乗ったようで、興奮していた。遊園地を後にして、夜行寝台列車で北京駅へ。

なお、参加者18名は以下の如し。

星恵美子（団長）。

〔一般参加者〕星紀美子、佐藤菜穂子（以上2人は中学生）、下村喜一、杉本裕三、是洞三栄子、加藤キミ子、小倉次雄、平田

京子、そして私。

〔学生参加者〕田島清美、庄司貴美子、上地智子、若木優子、佐々木知裕、中村篤志、加島貴典、丸山貴久。

（B）1999年度－第4次千葉県民・緑の協力隊への参加メモより。

1999年の旅は9月10日から19日にわたり、内蒙古植林を中心に、西安まで足を延ばして、同地の名所旧跡を見学した。ここでも植林活動関係を中心に記述する。

9月12日（第3日）

〔呼和浩特⇄バスにて包頭⇄そして恩格貝へ〕

朝食を終えて、8時45分にホテル金歳大酒店（JIN-SUI HOTEL）のロビーに集合。これから約5時間のバスツアー。行き先は私たちの目的である植林活動の現場たる恩格貝である。そしてスーツケースなどの大きな荷物をバスに積み込む。この作業で活躍していたのが1年生の男子3人組、當間智宏、鹿島祐輔そして金杉啓之の面々であった。彼らは黙々と荷物の積み込み作業に協力していた。もちろん3年生の加島貴典、佐々木裕幸の両君も頑張っていたのは言うまでもない。また団長の星恵美子さんの長年の友人で、内蒙古自治区青年連合会の副秘書長のサリンコワさんが早朝にもかかわらず、ホテルに駆けつけた。彼女の行為は私達に友情のなんたるかを教えているように感じたのは私だけだろうか。この時の通訳は留学生（3年生）の徐京紅さんをお願いした。徐さん！大役を引き受けてくれてありがとう。同時に徐さんも勉強になったであろう。

ガイドさんの話しでは、私達が宿泊したホテル（金歳大酒店）の前の通り〔大台什路〕は今から

200年前のままの道路であるとのこと。十分に舗装されていないため、砂埃りがあがる。30年ぐらい前の私の田舎の光景を思い出す。

またガイドさんは最近では黒豚の飼育が盛んで、それに比べると羊の飼育は横ばいとのこと。また昔の羊料理は、古老の評価によると、羊の糞（燃料）と井戸水で料理していたので美味しかったが、今は石炭と水道水で料理するので美味しくない、そうだ。やはり、ジックリと調理することが美味しさの秘訣か。現代は余りにも短時間で成果が求められる傾向にある。少なくとも、食事だけでは時間をかけたいものである。今年の旅行では、全行程を通して羊料理は少なかった。

10時半に高速道路に入り、一路、隣り町の包頭市へ。高速道路に入っただけで気づいたことは、呼和浩特市から包頭市までの下り片道線しか建設されていないのである。従って、逆のコース、包頭市⇒呼和浩特市への高速道路は存在しない。この理由は第1に、内蒙古自治区に資金がないこと（この下り線の建設に際しても、中央政府の補助金で建設されたそうだ）、第2には地元住民、主に農民が土地を接収された上に、高速道路の料金が高すぎて、農民たちが使用する機会は皆無であるので、農民には無用の長物との認識があること、しかも、農民たちが農産物を運搬手たちに売れなくなるなどの理由で、反対していたとのこと。確かに、高速道路を走っている車は比較的少なく、その多くも乗用車であって、日本の場合のように、トラックは少なかった。また故障して路肩に止まっている車が散見されたが、車の整備不良や過積載が原因のような気がした。

しばらくして、高速道路の北側には木の生えていない岩石から成る山々が迫ってきた。見事なま

での岩山であり、月の表面（特にクレーター）のような印象を受けた。とはいえ、所々にオアシスのように緑が点在し、そこには集落があった。また高速道路の南側には、トウモロコシ、玉葱、キビそしてヒマワリなどを栽培した畑が全面に広がっていた。いかにも、華北地方の風景である。車中でガイドの王（ワン）さんが、モンゴル人の好きな事として、①飲酒、②踊り、③歌唱の3点を上げた。特にお酒の場合は、飲まないなら初めから口にしないこと。途中で飲まなくなると、相手に失礼にあたる。飲むならとことん最後まで飲む事が良いとのこと。ここで、私はすぐに3年生の佐々木裕幸君を思い出した。佐々木家では「飲めないと思われていたお父さんが、突如、酒豪家である」ことが判明し、その影響で佐々木君も相当いける口である、という話を本人から聞いたことがある。で、モンゴル人との酒宴では、佐々木君がわが隊を代表する人物だろうと、王さんの話を聞いて、ふと思った。また、モンゴル人は9や99などの数字を験（ゲン＝縁起）が良い、といって好むそうである。

私は車中、ガイドの王さんが話す説明を聞いてメモしていたが、他のメンバーはと車中を見渡すと、バスの一番後ろでトランプに興じていた若い1年生（鹿島祐輔、金杉啓之、王金鳳の3学生）と3年生の加島貴典君を除けば、大部分の人たちは「夢の世界」に入っていた。そのためか、ガイドの王さんも「その夢を壊さないように」と、お喋りを中断した。もったいない！

11時40分頃に包頭市内に入る。街に入ると人・ひと・ヒトに圧倒される。包頭とは「鹿のいる場所」の意味だそう。人口は180万人。ほとんどが移住民、工業技術者の移住によって誕生

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

した工業都市である。特に、包頭の鉄は有名で、中国で使用されている鉄のかなり割合を占めている。従って、包頭市は石炭業とその石炭を使用した製鉄業の街である。そのためか、大気汚染が進んでおり、都市の裕福な市民は、去年の私の『旅行体験記』にも記したように、健康回復のために恩格貝の沙漠緑化基地に来て、沙漠ウォッチングに興ずるのである。そして12時頃に、「三合餃子城」なる看板の掛かっている飯店に入る。昼食である。今回の昼食は餃子三昧であった。これでもか、これでもかと言うぐらい、次から次へと様々な具が入った餃子が出てくる。一つの蒸し器を5～6人で平らげ、もう終わりだろうと思っていると、また出てくる、という感じである。さすがに、女子学生の多いテーブルでは餃子が残った。しかし、団長の星さんの発案で、残った餃子や饅頭は恩格貝に持っていくことになり、各テーブルの蒸し器には何も残さなかった。食後30分が自由時間で、学生は各自、近くの自由市場を散策していた。買い物をする人、探索に行く学生など、様々である。私は日本人の添乗員の山内さんと一緒に自由市場を見学した。そこで私はブドウ1房を購入した。中国語が判らない私は手振り与中国語の筆談で（～多少銭？＝いくらですか）売り子のおばさんに尋ねた。彼女は2.4元（＝36円）と書いた。私は、安いと思い、ためらうことなくブドウを購入した。そのブドウは粒が大きく、美味しかった。食べきするのに2日を要した。やはり乾燥地帯の柑橘類は美味しい。途中で1年生の女子学生（酒井裕美、菅野真由美そして菱木恵美の3人）と彼女らのボデーガード役の3年生の加島君に会う。彼女たちも自由市場の見学組であった。

午後1時20分に包頭市を立って、一路、沙漠

緑化基地のある恩格貝へ。しかし、その途中、今年は何と昨年には無かった私設「関所」が2ヶ所もあり、「道路利用税」を払わされた。その金額は車1台につき10元（約150円）。それだけ仕事がなく、「金持ち」の外国人旅行者から「道路利用税」なる名目で「掠め取る」挙に出ないと、生計が成り立たない『現実』が、この辺境にはあるのかもしれない。中国沿海部での「豊かさ」はこの地には波及していない。依然として、沿海部vs.内陸部の経済格差は著しい。中国が抱えている、不均衡な発展の弊害という厳しい一面を垣間見た貴重な体験であった。今年は、さらに、忘れられない、次の様な「ハプニング」にも遭遇した。それは、昨年同様、橋が掛かっていない黄河の支流をバスで渡っていたときの事であった。勢いよくバスが川に入った事もあってか、バスのナンバープレート〔蒙A08944〕を川に落としてしまい、川を渡り切って河川敷を走行していた時に、運転手さんが無いことに気がつき、大騒ぎになったからである。バスの「乗客」は全員、ボランティア精神に溢れる者たちなので、直ぐさまバスを降り、川まで引き返して、川でのプレート捜しを開始する。裾を捲くり、足で金属プレートを捜す。まるで「泥ヒバリ」である。そして、金杉啓之君が見事に〔蒙A08944〕のプレートを捜し当て、金杉を中心にガッツポーズをしているところを写したのが〔写真14〕である。この写真に写し出された各人の喜びの表現の違いに、各人の性格が読み取れる。表現にはくれぐれもご注意を！とは言え、各人の何の屈託もない表情の一コマを撮影できたことは、今回のボランティア旅行の「忘れられない思い出」になった。これに「共演」した各位に感謝したい。謝謝！

午後3時に恩格貝に入村し、3時半に入所式を終える。入所式とはオチョコに注がれたアルコール度の強い白酒を飲むという儀式である。学生各自の飲みっぷりはというと、片手でグイッと飲む鹿島祐輔君、おっかなビックリ飲む川上里美さん、目をつぶって飲む酒井裕美さんなど、人それぞれである。式終了後、昨年からの知り合いの孟さん〔売店兼フロントの電話係〕とトウトウ君〔当用漢字にないので、カタカナ表記する〕にセーターとジャンパーを贈った。また星さんのお友達の子供さんには、ミッキーマウスのパンツとシャツを贈った。星さんの話によると、その中国人の友人は「自分はいつも日本人から沢山の贈り物をもらうので、近所の中国人を配慮して、いつも近所の現地人（中国人）にお裾分けしていたが、今回は絵柄が中国でも（もちろん日本でも）人気のミッキーマウスであったので、自分の子供がすぐ着た」と話していたとのこと。

部屋割り後、各人が軽装で明日からの沙漠植林への下調べを兼ねた沙漠ウォッチングに出かけた。約1時間半の行程である。まずは沙漠の近くまでバスで移動する。そこから沙漠歩行の開始である。初めは、各人余裕があるのか、談笑しながら歩行するも、次第に隊列が長く延びはじめ、幾度となく歩行を中断して、遅れて歩いてくる人を待つことになった。やがて視界が360度、沙漠だらけの所に到着。若い学生諸君は果敢に、砂山の頂上をめざす。頂上を究めると直ぐに山底への下降ダッシュ！〔写真15〕もちろん、この砂山の高さは30～40mぐらいはあり、少し勇気がないと躊躇してしまいそうな高さである〔写真16〕。さすがに3年生の加島貴典、田島清美、庄司貴美子、それに千葉大生の佐々木知幸、若木優子の各ベテ

ラン諸氏の健闘がひかる。歩き方に無駄がない。さっさとつぎの山へと移動する。それを追うかの如く、徐京紅さん、佐々木裕幸、沢田泰宏、中村篤志の3君が、また1年生の金杉啓介、鹿島祐輔、當間智宏の男性陣と川上里子、王金鳳、掛川朱津乃、菱木恵美、菅野真由美、酒井裕美そして工藤敦子の女性陣も「転げる如く」に下り、「息を荒らげて」登るというup-downのきつい「レース」に参戦した。3つぐらいの砂山レースで息切れの状態であった。星さんは滑り台方式での参加となる。おそらく、各自「これが沙漠か」と実感したと思われる。砂山の底に降りると、周囲の四方が分からなくなり、ほんとうに迷ってしまう。また砂の風紋も綺麗に残っており、何だかこれらの風紋に足をを入れて消してしまうのかと思うと、惜しい気もした。この気分は、まさに、アポロ13号のアーム・ストロング船長の「月面への第一歩」の気分かもしれない。学生諸君からは「古い比喻」とのお叱りがきそうなのでこれでお開きにするが、要は、参加者全員がそれなりに「過激な沙漠の運動会」に参加し、十分に沙漠を満喫したのである。

私も学生たちの陰謀にはめられ、この「運動会」に参加するはめになった。過激にトライしてはみたが、案の定、足がもつれて「大変」であった。この「大変」さは記念写真〔写真17〕からもお分かりだろう。足のもつれから写真撮影に遅れたため、罰として皆の前でのゴロ寝取りとなった次第である。

沙漠ウォッチング後、7時から夕食。大家族よろしく皆で丸テーブルを囲んでの食事。お喋りしながらの食事のせいか、美味しく食す。この夕食時に、有り難いことに、掛川朱津乃さんがお茶漬

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

けの元、海苔、そしてフリカケなどを持参し、お裾分けに預かった。本当に掛川には感謝！これで食欲がでたのか、私のテーブルの学生諸君は大きなお茶碗で2杯飯を食べた人が多かった。ともかく、モリモリ食べて、体力をつけておかないと、明日からの本格的な植林作業が大変である。

9月13日（第4日）

〔恩格貝にて、終日植林作業－2日目〕

6時50分に起床し、7時30分に朝食。今日もしっかり朝食を食べる。もちろん、中華料理が朝食である。さすがに起きたばかりのせいか、朝食の写真撮影を忘れた。8時30分までに沙漠緑化基地の門の前に集合。1年生からは「やる気満々」という気概を感じる。掛川さんは余裕のピースサインを、工藤さんは片足を引いての「お辞儀」スタイルで、また酒井さんは上下のジャージで「服装」を決め、ただ菅野さんだけが1年生らしく「緊張」して写真の一コマに収まった〔写真18〕。8時37分に恩格貝を出発し、一路、バスで今日の植林の現場へ向かう。9時頃から現場で植林作業が始まる。今年の植林活動は、気温が例年になく高温のために一く現地ガイドの王さんの話では、今年の内蒙古地方は高温で47℃の日もあったそうで、そのような日には、ただ熱風を送るだけの扇風機は役に立たず、住民は夜、暑さのために寝れず、道路に出て涼を取っていた、という。もともとこの地方は涼しいため、クーラーなどは役所や住宅には設置されていない。＞一昨年植えている新疆ポプラではなく、松の植林となった。そのため、植林作業の手順も異なり、今年は全員が「初心者」のため、初めからその手順を教えてもらうことになった。

まず、①風砂を防ぐために、長い藁（乾燥した葦の茎）を乾草の山から捜し〔写真19〕、②それを植林予定地の砂地に運ぶ。また③砂地を整地して〔写真20〕、運ばれてきた長い藁を砂地に埋める穴を掘る〔写真21〕。そして④枠取りを作り（風砂でせっかく植林した松が砂で埋まるのを防ぐ流砂対策の1つ）〔写真22〕、⑤松を植える穴を堀り、⑥その中に羊の糞を入れ〔写真23〕、⑦松を植える〔写真24〕。⑧布バケツ1杯分の水を松に流し込み〔写真25〕、最後に⑨乾燥した砂を掛けて、足で踏み固めれば、一連の植林作業が終了する〔写真26〕。この9工程のうち、①が地味で、根気のいる作業であるが、使用するのは「手」だけなので、参加者の大部分の者は「口」を自由に使って楽しい「お喋りタイム」でもあった。全般的に感心したことは、参加者はほとんど全員、自発的に仕事を見つけ、嫌がらずに率先して作業に係わっていたことである。大学の授業では見られない学生諸君の姿であった。この事を後日、教授会で報告した。各先生方の反応は「やるじゃないか、うちの学生も」とすこぶる好評であった。要は、教師が学生の「やる気」をいかに引き出すのか、という事ことであろう。

特に、乾草が置かれている所に長い藁が少なく、それを探すのに時間がかかった。学生たちは汗だくで探すも見つからず、まるで石炭の鉱脈を探し当てるような作業であった。その「鉱脈」を探し当てれば、作業は楽なのだが。午前中の作業は、参加者が要領を得ないためか、作業が余りはかどらず苦戦した。指導員も作業の進み具合が遅いとぼやいていた、と後日、聞いた。参加者全員が「素人」なのだから、遅れても仕方がないであろう。このことは常識であり、「素人」作業の遅れをぼや

く指導員は、とりもなおさず、教え方の下手な指導員といえないだろうか。—私も教員故に、これは私の問題かも。—

そんなこんなで、12時30分頃に午前の部の作業を終了し、作業現場から徒歩で20分くらい離れた所にある「草月の林」に移動。ここで2時半までランチ・タイムをとる。食事は昨年同様、「大塚のボンカレー」を基本に、太い胡瓜（キュウリ）1本、そしてソーセージとゆで卵1個、ワカメスープというメニューである。さて問題のデザートであるが、今年もスイカが沢山でた。昨年のももあり〔98年9月11日を参照〕、私は極力食べないように、と思った。しかし昨年の『事件』が事前に学生諸君に知られていたせいか、他の者が食べないため、そのオハチが私に回って来てしまった。そこで、私は中国でスイカ恐怖症になるのは嫌なので、「返り討ち」を覚悟で、「昨年の敵討ち」を決行した。その結果は「案ずるより産むが易し」で、今年は無事、スイカの敵討ちを果たした。考えてみれば、今年のスイカは昨日、包頭市に寄った際に、星さんがガイドの王さんと一緒に、自由市場の個人商店から出来の良いものを3～4個選んで、直接購入したものである。昨年のように、道路に50メートルくらい積み上げられていたスイカ群の中から（従って、売れないスイカは太陽光線を浴びて、そのまま腐敗していくのだが）買ってきたものではない。だから、今年のスイカは美味しいはずである。2時半まで私はこの「草月の林」の中で横になっていた。2時半近くに起き、リーダーの星さんからコーヒーを1杯ごちそうになる。そして再び植林の現場に行き、午後の作業に取りかかる。しかし今年は、昨年とは少し事情が違った。沙漠に暗雲が立ち込め、やがて雹が、

そして雨も降り始める。終いには雷も鳴り出す。その雨も強く降りだしたので、作業を一時中断して、「草月の林」に逃げ込む。30分間雨宿りをした。雨雲が切れ、太陽が顔を出す。それと同時に私たちも現場に戻り、再度、植林作業に取りかかる。様々なハプニングを体験しながらも、作業は4時半に終了した。126個の草方格〔枠取り〕を作り、63本の松を植えたに過ぎなかった。この数は昨年のポプラの植林本数よりはるかに少ないものの、様々なアクシデントを考慮するならば、それなりに頑張ったと納得するしかない。最後に現地で記念写真を撮る〔写真27〕。いずれにせよ、1つの仕事をやりおえた人びとの顔は、なんとなく充実感が漂っている様に見えたのは私だけではないであろう。

5時半に沙漠緑化基地に戻り、そして基地の近くの荒地〔沙漠〕に記念樹を植えた。—昨年植えた庄司貴美子さんと田島清美さんの記念樹は今年も大きく成長していた。本当に羨ましい限りである。植えても、その木の成長は植えた土地の地味や天候などに大きく左右されるので、彼女たちの記念樹はきわめて幸運な条件の下にあると云えよう。今年の1年生諸君の記念樹がどのような運命をたどるかは「神のみぞ知る」、か。

夜8時～9時に同基地の所長：遠山征暎先生の「恩格貝沙漠講座」に参加する。1年生の全員と2・3年生の有志も数人出席していた。地球上の沙漠は24万haに及び、これは実に地球の1/4を占めている。この沙漠を緑化できれば、地球上の飢えは消える。そのためにも遠山先生は中国の黄土緑化に取り組んでいる、と主張する。そして、この「黄土（レス土壌）に手を出してはだめだ」と主張した自分の恩師リヒトホーヘン（米人）先

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

生の考えは誤りである。その理由は、中国の沙漠地帯は天山山脈、崑崙（クンルン）山脈、陰山山脈などに囲まれており、その山々に降る雨水が伏流水となって、沙漠の下を流れている。だから沙漠の地下には水がある。その水（地下水）を使えば緑化は可能だ。また、煉瓦作りの家に土をかけるのは、この地では熱を逃がさない手段であり、従ってこの地では理想的な家であり、廃屋などと考えるはいけない。とにかく、アジア地域での沙漠・荒野の緑化を通して、『アジアは1つ、世界は平和』を達成したい、と遠山先生は力強く主張された。なお、遠山先生の話しの中で、世界のアグリ・ビジネスマンは自分たちの商品（農産物）を国連に高額で、しかも大量に売却が可能なため、アフリカやアジアなどに難民が発生するのを歓迎している節が見受けられる、という意味深い言葉が、私の耳に残った。

沙漠講座は時間どうり1時間で終了した。先生も時間を気にしているようで、しばしば時計を見ながら講義をなさっていた。9時半から遠山先生の銅像が立っている広場で、現地の住民も参加して、キャンプ・ファイヤーが催された。星さんがスイトンを作って、参加者に配っていた。私は30分ぐらい参加したが、疲れていたため部屋に帰って就寝。一最後まで参加した人の話しによると、現地ガイドの王さんは、モンゴル人だけあって歌が上手であり、しかも日本語の歌も最新のものまで知っていた、とのこと。これには驚いた。「商売道具」とはいえ、これ程までに外国文化にのめり込む気概がはたして私に有るだろうか。反省材料をもらった気がした。

9月14日（第5日）

〔沙漠の中の貧村訪問、恩格貝から包頭市へ〕

8時35分に恩格貝の緑化基地を出発して、昨年（98年）作られた8mの公道〔砂利道〕を通過して沙漠の中の貧村たる徳生城（とくしょうじょう）を訪問する〔写真28〕。徳生城は恩格貝から南へ12kmの所に位置し、28戸、110人が生活している。この道路のお蔭で車を利用すると短時間で往来が可能になった。住民の生活を、私が見た限りで、紹介してみると、まず、電気がない。一切ない。ランプ生活である。つまり、ここではすべて太陽に支配され、彼らの日常生活は「日の出と共に起き出し、日没と共に就眠する」ことを基本形としている。大きな荷車の牽引力はロバであり〔写真29〕、時間が緩やかに過ぎていく。作物はトウモロコシが村の入り口の畑に栽培されていた。この地もご多分に漏れず、今年は水不足のためか、生育が芳しくないことは素人の私にも分かった〔写真30〕。産業と言えるものは、山羊の飼養で、カシミヤ作りが唯一の現金収入源である〔写真31〕。また副村長の家を訪問させてもらったが、彼の自慢は、娘さんが村でただ1人、この村から約90km離れた包頭市内の工業高校を卒業したことである。そして娘の大切な卒業証書を私達に見せてくれた。農村の人は、洋の東西を問わず、少し裕福になると、一家の一人を高等教育を受けさせ、その子供を自慢の種にする傾向がある。何を隠そう、実は、私の母親（現在80歳）も福島県会津地方の農家の娘であった。家が少し裕福な地主であったため、当時としては破格な高等教育を受けている（仙台の当時の三島学園高等師範科（今日の三島学園大学の前身）を卒業し、二十歳ぐらいで田舎の職業実践学校の教師として赴任してい

た)。そのためか、副村長さんの自慢は私には理解できた。その娘さんは村で唯一の足踏みミシンを所持し、そしてこのミシンを使って、村人の布靴を作っていた。この事を知って、ようやく、私達が初めてあった村人のお婆さんが私達の靴を指さし、なにやら中国語で話しかけていた事が分かった様な気がした。その老人はおそらく「皆さんの靴は良いですね。できれば・・・」という内容ではなかったのか。またこの副村長さんの家で、初めて犬をみた。厳しい食料事情を考えると、犬などのペット類を飼うことなどは一般にはできない。この点からも副村長さんの家の「豊かさ」が理解できよう。ただし、道路が通じたことで、この村は、これまでの全ての村民が『平等に』貧しかった状態から、おそらくは「貧富の格差」を前提とする社会へ変化するであろう。村民の間に「我々の資本主義的」悪しき習慣が蔓延しないことを願いたいものである。この点を確認すべく、数年後にもこの寒村を訪れて、その変化を観察したいものである。一く将来は、このような純粋な農村が都市（的要素＝資本主義的経済）との接触によって、変化する様を論文に執筆したい、という学究的意欲に駆られるが、まずは中国語をマスターすることが、現在の一番の課題であろう。＞一

とはいえ、住民には「生活の苦しさ」という表情はない〔写真32〕。まだ全員が「平等」だからであろう。また他の民家をも見せてもらったが、昨年見た民家とほとんど変わらない構造である。家は1部屋で、その1/3が台所、その1/3が居間、そして残りが高床の板を張りめぐらした寝室兼お客さま接待所という構造である。もちろん、底は土（土間）である。このような寒村では、中国の一人っ子政策の影響はなく、子供が2人以上の親

もいた一（少数民族には適用外）一。団長の星さんは村の子供たちに『平等に行き渡るもの』（氷砂糖）をお土産に用意し、分け与えていた。私はフィルムのプラスチックケースを5～6個、種の保存容器として利用するようにと、副村長さんの奥さんにあげた。その途端、近所のお婆さんが不遠慮にも、その1個を取り上げ、うさんくさそうに見ていた。そして自分の利益には成らないと判断したのか、それを戻し何食わぬ顔で副村長さんの家を立ち去っていった。星さんは、この寒村も「外国人は自分たちに豊かな物を運んでくる手段である」と認識してしまうと、環境が厳しい故に自力更生という基本的生活を放棄して、『外国からの援助』に頼りきる村になる危険性があることを指摘していたが、「資本主義的な豊かな生活に慣れきってしまい、このような寒村を単に自分が過ごした何十年か前の生活（映像）の追体験としてノスタルジックに訪問する」私たち外国人〔訪問者〕の側もこの点を意識して村民と接すべきであろう。

なお、この村には古い井戸が1本あるだけである。したがって、水不足のため収穫が少なく、貧困生活から抜けられない。一人当たりの年間収入は610元（1元＝15円×610＝9150円）である。貧困生活から脱出する手段は電気を引き込み、深い井戸を掘り、電動ポンプを設置し、灌漑設備を充実させることだそうだが、そのためには莫大な資金が必要である。また電気を引き込んだとしても、その電気料金の支払いも彼ら現地人には相当な負担になろう。事実、電気が通っているが、電柱から各家庭に電線が引かれていない部落を多く目にしている。やはり、電気料金を支払える程の「豊かさ」をも手にしていない所が内陸部の諸地方にはいかに多くあることか。これが私

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

たちが植林している沙漠地域の寒村の現状なのである〔写真33〕。

以上のようなことを学習しながら、10時20分にこの徳生城を離れ、再び沙漠の中の道を通して、緑化基地に戻る。その途中、10時30分～11時25分まで再度、沙漠ウォッチングにチャレンジした。この五里明砂〔ごりめいさ〕の沙漠はハンパではない。

この五里明砂は、恩格貝と徳生城の中間地点にある。1991～93年の間に植林したポプラの森である。この砂丘の周辺には沙漠トカゲや昆虫なども見られる。高さ50～70mの砂山は当たり前で、その山の勾配が急なため、迂回ルートを通って頂上へ。また頂上から底を見下ろすと、これまた下り急勾配で吸い込まれそうな錯覚にとらわれる。まさに私たちは、久保田早紀の『異邦人』をBGMに流せば、まさに沙漠で遊ぶ「変な異邦人」というところであろう。例えば、星さんや徐さん、大里さんそして竹中さんは砂山の頂上からお尻で滑り降りるし、また1年生の男子（當間、鹿島、金杉の3君）は、ビーチ・フラッグ競争をこの沙漠で、しかも、王さんと川上さんの提案で、下り勾配のきつい砂山の頂上に伏せて、そこから一挙に駆け降りてのフラッグならぬ空のペットボトル争奪戦を数回に渡って繰り広げていた。私もカメラマンとしてこの競技をみていたが、どうも決定的なシャッター・チャンスにカメラ撮影が合わず、撮影した写真は、金杉が好ダッシュで突進したが、ペットボトルの少し前で砂に足をとられて転倒、2番目につけていた當間がペットボトルを獲得するというシーンの1枚だけ。鹿島はかなり前で、砂に足を取られて転倒していた。残りの人たちは、沙漠で「異邦人」になりきり、この広

大な五里明砂の砂漠を駆けていた。

12時にセンターで最後の昼食。そして1時30分に遠山征英先生に別れの挨拶をし、そして遠山先生を囲んでの写真撮影〔写真34〕。そして緑化基地の近くにあり、周辺農民の成功した自立経営のモデルたる「ダチョウ飼育園」を見学した。

2時10分に包頭市へ向けて出発。その途中、私設「関所」を通過したが、今回は既に往路で支払っている点を強調したのか、すんなりと通過することができた。

包頭市近くの黄河に掛かる大橋で、途中下車して、皆で黄河「探索」。大半の参加者は黄河での「優雅な」モーターボートに乗船し、黄河の黄色さが河の砂であることを実感した。黄河は砂自体の流れである、と言っても過言ではない。包頭駅では午後7時29分発の寝台列車は3時間遅れとの連絡が入り、皆ガックリ。駅の一般待合室では、一見して怪しいお婆ちゃんが、私たち外国人旅行者をターゲットに、安物の押し売りをはじめ、終いには「ピストル」らしきものを出して凄味だす。幸いにして、現地ガイドの王さんが彼女に中国語で厳しく一喝して「事無き」を得た。このため、一般待合室からVIP待合室へ移動した。ここは一等寝台車両の乗客だけの待合室のようで、ゆったりとした部屋で、怪しげな人物はいない。さすがに3時間の待ち時間は長いのか、学生の中にはトランプ遊びに興ずるものもいた。同じ列車を待つ中国人もゲームで遊んだり、新聞を読んだりと様々であった。ようやく列車が入線するとのことで、ホームに入って乗る列車番号の前に並んでいたら、実際に入ってきた列車は先頭と後尾の列車順が逆で、全員が大慌てで自分の乗る車体番号をめざして右往左往する。ホームは大パニックと化

した。私たちはほぼ真ん中に位置する車両であったので、移動はそれほどでも無かったが、大きな荷物を持っていたので一苦労。一番苦労した乗客は先頭車両に乗ろうとしていた乗客と一番後尾の車両に乗ろうとしていた乗客たちであろう。彼らはほぼ全車両の距離を短時間で移動しなければならず、私たちの苦労の比ではなかったであろう。ようやく車両に乗り込んだものの、私たちの部屋は連番の部屋ではないため、部屋探しがこれまた大変。私は年配の女性軍と相部屋になる。人生の先輩者としてお話を聞かせてもらった。いろいろな点で、大変、勉強になった。2時間ぐらい談笑して、12時頃就寝。私は列車の音を子守歌に直ぐに爆睡。

なお、参加者23名は以下の如し。

星 恵美子〔団長〕

〔一般参加者〕大里貞子、竹中きみよ、そして私。

〔学生参加者〕佐々木裕幸、中村篤志、酒井裕美、工藤敦子、掛川朱津乃、菅野真由美、川上里美、菱木恵美、加島貴典、沢田泰宏、田島清美、若木優子、佐々木知幸、當間知洋、王金鳳、鹿島祐輔、金杉啓之、庄司貴美子、徐京紅 (Xu Jinghong)。

(C) 2000年—第5次千葉県民・緑の協力隊への参加メモより。

2000年の旅は9月8日から16日にわたり、内蒙古での植林を中心に、モンゴル草原まで足を延ばし、草原での「生活」を満喫した。以下では、内蒙古・植林関係を中心に記述する。

9月9日(第2日)

〔包頭⇒宿亥図郷(しゅはいとうごう)での植林⇒恩格貝〕

朝、包頭市のホテルの窓から遠くの連山を見る。うっすらとスモッグが掛かっている。やはり包頭市は重工業都市である。朝食は饅頭、ゆで卵、羊(牛)乳そして漬物、お茶であった。

ホテルを8時15分に出発。包頭市内もやはり2008年のオリンピック招致を意識してか、建物や道路〔都市のインフラ整備〕工事が行われていた。さらに郊外に出ても、これまで橋がなかった所にも鉄筋の橋が工事中ないしはすでに出来上がっていた。これらの川はワジ(降雨時の川)なので、降雨時にこの鉄筋橋がどのくらい耐えられるのかは疑問であるが、以前よりも移動時間が短縮される点では有り難い。しかし同時に、面白さと言う点では、つまらなくなった。昨年のようなバスが河に乗り入れる、と言うオフ・ロード的な「冒険」も体験できないし、またその時に生じたハプニング〔'99年9月12日を参照〕などにも遭遇できそうにないからである。それはさておき、今年は、恩格貝に行く途中の道路近くまで、砂が押し寄せている。砂漠化は確実に進行している。もちろん、政府による計画的な、整然とした植林も施されていた。9時40～57分にかけて、バスはヒマワリ畑で小休止。私も外に出て用を足し、同時に、青空を背景とした向日葵の写真を撮る。この写真は私のお気に入りの1枚になりそうな出来ばえだ。この休憩後、4年生の徐京紅さんが車酔いになり、口数が少なくなる。彼女は夏休みを過ごしていた北京からの参加者である。その他の人たちは「船を漕」ぎだす。外の景色を観察している者は少なかった。もったいなや!

今年、恩格貝の緑化基地で働いている星恵美子

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

さんを拾って、11時10分に宿亥図郷（しゅはいとうこう）に到着する〔写真35〕。同地区人民政府の主席（町長）李さんの出向かいを受ける。現地には星さんが今年同町と折衝して、私たちが同地で日本人として初めて植林するという機会をセッティングしてくれたのである。そして約1時間、すなわち12時20分まで、同村が用意した土地で植林を行った〔写真36〕。小倉さんが同町にスコップ、布バケツそれぞれ20個ぐらいを寄贈した。なお、中国のスコップは柄が長く、梃子の原理をうまく利用できるように作られている。それに較べると、日本のスコップは柄が短く、身体を屈めねばならない弱点があるように思われた。午前中の植林を終え、昼食は同町の人民政府（町役場）の食堂で頂いた。出された食事は典型的な中華料理であった。お茶はジャスミン茶に塩が混じったものであった。慣れていないせいか、私には少し飲みづらかった。そして、問題は48度にも達する白酒（パイチュウ：コーリャンやトウモロコシなどの穀類を原料にした蒸留酒）を立て続けに3杯飲まなければならないことである。しかも、参加者全員である。酒に弱い私は、かなりの物を胃に詰め込んで飲んだのだが、すぐにダウン。町長の李さんに仮眠室のベットに横になるように指示されて、2時30分頃に現地の添乗員の倫さんが迎えに来るまでの約1時間、寝ていたようだ。——別のベットには現地人が横になっていた。——（お互い、酒で苦労していますね！と声を掛けたい気分であった。）私の頭は依然としてクラクラ状態。ゆっくりした歩みで植林現場に行くも、作業にならず、私は日陰で休息していた。情けない！——大学時代に飲酒「訓練」をしてこなかった結果か！——この時間を利用して、星さんと、今回

の宿亥図郷を選択した理由や恩格貝での植林状況などを聞く。こうして4時までに参加者全員の協力で150本のポプラを植える。最後に、「日本：第5次千葉県民隊造林基地」なる文字が記された看板を立て、この前で、各参加者の記念写真を撮る〔写真37〕。また各参加者は町長の李さんから感謝状を頂いた。

この造林基地の近くにスイカ畑があり、そこには多数の小玉スイカがころがっていた。これは食用のためかと尋ねたら、来年の種用として残しているとのこと。それにしても、何と数が多いことよ！また、町の中の道路は土（未舗装道路）であり、かつての日本の農村を彷彿させる。私にとっての中国辺境地方の農村の訪問は、幼年期に見た農村風景の追体験といえるのかもしれない。そして、30年後の今日の日本社会と中国での現在進行形の変化を重ね合わせると、「工業化＝近代化」の意味が分かるかもしれない。

ともあれ、4時30分に宿亥図郷を離れ、一路、寄宿舍のある恩格貝へ向かう。5時過ぎに恩格貝に到着。すぐに共同風呂へ。今年もお湯とは言えない「熱湯」を、水で薄めながら身体に掛ける。いつもの「儀式」である。日本の様な湿度が無いため、ほとんど汗をかかない。そのため、水を浴びるだけでサッパリした気分になる。この風呂時間は限られているため、男湯では、芋洗い状態である。そして、夕食。今年から賓館の東側に新しい食堂がオープンした。しかし、少し離れている（宿舎から歩いて10分の距離）ためか、不便を感じる。ここでは、典型的な円形テーブルに中華料理。羊の肉、トマト、キュウリの炒め物、ベーコン、炒めご飯などなど。これらの味付けが、不思議と、年を追うごとに日本人好みに変化してき

ている。この様な味付けにまで、日本の影響が及んでいる。この事は、経済法則に従えば、当然かもしれない。——グローバル化しつつある今日、体制の如何を問わず、いかなる行為にも経済法則が貫徹しており、私たちは常に経済法則を考慮して行動せねばならない、と言う教訓を示しているように思われた。——

夕食前に、私は現地のペンパル (pen pal) の 1 人、孟凡梅さんと再会した。彼女はいつもの様に、日本人相手の売店にいた。彼女は日本語を独学で、しかもその日本語にさらに磨きをかけるために、日本人が来るこの恩格貝の砂漠基地に就職して、日本人相手の電話係と売店を担当している。その孟さんが今年の 3～4 月頃に、内蒙古での沙漠緑化紹介キャンペーン（主に西日本、東京では 1 回の活動だけ）のため来日し、そして日本製のパソコン（シャープのメビウス）を購入して帰国した。そのパソコンに微弱の電流が漏れているのか、時々ビリビリするとのこと。これは、もしかしたら、中国の電圧は日本のそれと異なるので、漏電しているのではないだろうか。——私も日本製の家電を中国への土産にしようと思い、秋葉原の電器街で聞いたら、中国の電圧に合う特別家電があり、これ以外の家電は中国の電圧に合わせる変圧器を購入しないと、電圧の異なる日本製家電はすぐダメになるとのこと。しかも、その変圧器は物によっては、家電本体よりも高額である。やはり中国の電圧に合う特別家電を初めから購入したほうが安いようだ。——孟さんのパソコンを実際に見ていないので何とも言えないが、おそらくは、変圧器の故障（中国製の変圧器は簡単に故障すると聞いている）ではないだろうか。少し心配である。

9 月 10 日（第 3 日）

〔恩格貝での植林活動—第 1 日目〕

6 時 30 分に起床。7 時に朝食を新館の食堂で食べる。食事内容はほとんど同じ。食後、各自の部屋に戻り、準備して「いざ植林、2 日目へ」と自分に気合を入れて、正面門へ集合。そしてバスで 30 分くらいの所の沙漠の現場へ直行する。そのバスの中で現地指導員の安田さんから、「恩格貝にも、包頭の企業集団が土地が安く、かつ包頭までの道路も良くなったので、包頭への野菜の供給基地にすべく土地を購入し、農場ができた」という話を聞いた。この事実は、恩格貝もついに包頭市の農業基地としての役割が与えられた事を意味する。このことは、ともあれ、中国人（企業家）が植林によって沙漠の移動が止まり、沙漠が野菜畑という経済的な価値物へ転化したことを認め始めた事例として特筆すべき出来事であろう。

植林現場では、まず始めに準備運動。これは、俗に言う NHK の「ラジオ体操：第 1・第 2」である。ところがである。今日（きょうび）の若者たちはこのラジオ体操を知らないのである。——私の世代に属する人は恐らく、小・中学校の夏休みの日課として、朝、町内の神社の広場などでこのラジオ体操をやらされ、参加の印として町内の役員さんからスタンプを貰った光景を思い出すであろう。このようにして、知らず知らずにラジオ体操を身につけたものである。——しかたがないので、皆で大きな輪になって、各自、思い思いの柔軟体操へ変更して終了。その後、本格的な植林活動へ〔写真 38〕。今年は、なだらかな砂の丘陵地に新疆ポプラを植える。例年のごとく、各々が深さ 80 cm の穴を掘り、そこにポプラを入れ、そして水を掛けた後、再度、砂を約 8 割埋め戻し

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

て、完了。この繰り返しを12時頃まで続ける。

12時～2時までが、昼食兼昼休み。普段慣れない中腰姿勢、スコップでの砂掻き、そして直射日光などで疲れもピークに達した時の昼食。今年の昼食は昨年までのボンカレーではなく、砂地に竈（かまど）を造り、周囲の枯れ木を燃料にして作った、温かい水餃子とワンタン、炒めご飯、ソーセイジ、ゆで卵そしてキュウリといった献立であった。特に、温かい水餃子とワンタンは美味しいためか、大きな鍋で作ったにもかかわらず、参加者全員で残さず平らげる。そのためか、現地指導員の安田さんは「明日は、水餃子とワンタンだけで十分なのでは」などと皮肉られる程であった。何を隠そう、私も水餃子とワンタンを2杯も食べた組であった。食後は①昼寝をする人、②沙漠ウォッチングする人、③周辺の木立を散策する人と、各人思い思いの行動を楽しむ。お歳を召した方々は①組へ、若者たち（藤井香野緒、笠原祐介、佐々木裕幸、浜崎昭博、田島清美、徐京紅、中村篤、霍文亮そして後藤ゆかり（江戸川大生）の学生諸君）は②組である。なお、田島さんは沙漠に設置された竈が珍しいのか、竈に興味深くしげしげと見入っていた。すかさず、その姿を写真に撮った。

私はというと、少し休息してから、沙漠ウォッチングへと出かけた。この休息の間、私は現地のもう1人の「友人」たるトウトウ君と話をした。その彼が今年の5月8日の『朝日新聞』の広告欄を大事そうに見ていたので、「どこか気に入った記事でもある？」と尋ねた。それは、月刊『ヤング・ミセス』の新聞広告で、あのノリピー（酒井法子）がモデルとして載っているものであった。ノリピーは、以前、出演した日本のテレビ番組が中国で放

映されてからというもの、中国人の間で急速に人気を博し、今や、彼女は中国人ならば誰でも知っている有名なトップ・クラスの「日本人女優」なのである。——私は彼女が出たそのテレビ番組を知らない。——この事実は、昨年、景山公園に行った時にも、1人の絵師が彼女の名前を、鮮やかな絵の具を用いて、描いていたことから理解ができた。いずれにせよ、中国人は理想的な日本女性像をノリピー（酒井法子）が演じた役柄に求め、やがて主客転倒してノリピーその人に求め出したのである。さらに、トウトウ君が言うには、最近、中野良子主演のテレビ・ドラマ〔タイトル不明〕が中国で放映された結果なのか、中野良子の人気も上っているとのこと。その理由として、テレビ・ドラマの中での彼女の役柄と日本女性としての気質に、中国人は惹かれたようだ。しかし、これは、「日本女性はこうあるべし」という中国人たちの願望であり、また中国人の日本女性のステレオ・タイプ化である。このような傾向には危険な匂いを感じる。どの国にも道徳的な意味での善人も悪人も含めて、多種多様な人間がおり、その中からどの人を選択するかは、各自の自己責任である。この自己責任を前提としない「生きかた」は、思想統制を受け入れ易い「お上」体質〔上意下達の性質〕を払拭していない社会なのではないだろうか。

さて、この様な会話を終えて、私も沙漠ウォッチングへ。今年は砂丘に植林し、流砂のため砂に埋もれた「不幸な事例」〔写真39〕を多く見ることができた。本当に残念ではあるが、これも「砂丘は移動する」の実例として割り切らなくてはいけないであろう。それにしても、乾燥した砂地を裸足で歩くことの何と快感なことよ。幼い時に覚

えた川原の砂地を歩く感触と異なり、足に砂がまとわりつかない。それと風による砂丘の風紋は、やはり芸術品である。その芸術品に私の裸足で「装飾」を加える行為も快感でやめられない。各人それぞれの砂丘の頂上へ登って行く〔写真40〕。その中でも、今年の新人の笠原、藤井の両君は、一緒に参加した奥野理恵さんの2人の子供たちを、それぞれの肩に乗せて砂丘を登って行く。この砂丘登山は足場が柔らかいだけに、かなりのスタミナを必要としていたと思われる。それにも係わらず、頑張っ、子供たちを頂上に立たせてくれた。子供たちも、さぞや、嬉しかったに違いない。

2時～4時26分で午後の作業は終了。合計で364本を植える。寄宿舎へ帰る前に、冷たい地下水で、各自、顔や手などを洗い、またこの水を美味しく飲む。本当に冷たくて、美味しい水であった。涼しい風も吹きはじめ、確かに作業の潮時であった。この時、浜ちゃん（浜崎昭博）が暑さのためにランニング姿で作業をしていたのだが、身体も顔も日焼けしていた。これを、浜ちゃん自らが「どこで焼いたの。つい一寸モンゴルで」と冗談をかまして、その場にいた人々を笑わせていた。やはり浜ちゃんの「日焼け」から判断しても、直射日光はかなり強いと実感できた。

寄宿舎に戻る前に、田島、佐々木、徐そして中村の諸君と私は、以前に記念植樹した場所に行ってみた。田島さんの木は、プレートが残っていたせいもあり、確認できた。すでに4年目に達しており、4mぐらいに成長していた。近くには、庄司貴美子さんの植えた木も同様にスクスクと成長していた。それ以外の学生の木は、残念ながら活着しなかったようで、その存在すら捜し出すこと

ができなかった。残念組の佐々木、徐そして中村の3君は、「友誼林一緑の協力隊記念植樹」と記されている立て看板で、虚しく3つの雁首を並べての「残念記念写真」。本当に残念でした。私も残念組。田島さんは、中国での自分の「分身」と一緒にキメのポーズで、「はい、チーズ」。パ・チ・リ。

〔写真41〕——おめでとう！彼女は毎年、自分の「分身」の成長を口実に、中国に来るモチベーションを得たことになる。——継続こそが「力なり」ですよ。田島さん！——

5時に寄宿舎へ戻る。風呂そして夕食を済ませる。夕食後、日記を書く私と、テレビを見ると言う霍君を除いて、ほぼ全員がシシカバブ（羊の丸焼き）を食べに、星さんの現地の友人のお店に出かけた。話し相手がなくなった私は——生来の私は、本当は寂しがり屋か（？）——現地の中国人相手のお店に飲み物を買に行った。その売店では中国人の歌手による歌謡ショーが放映されていた。テレビの周りには2～3人の周辺住民も熱心にTVを見ていた。その舞台が少し大掛かりなセットであったので、私の視線も自然とTVに注がれた。どうやら、その歌謡ショーは、2008年のオリンピックを北京に招致するデモンストレーション〔中国政府による国民への啓蒙活動の一つ〕であること、そしてこの歌謡ショーに中国の有名な歌手が相当数出演していることなどが、見ているうちに、理解できた。この歌謡ショーは、上記の社会資本（インフラ）の整備とも一脈を通じており、中国政府のオリンピック招致への並々ならぬ決意が伝わってくる。売店の中国人に筆談でたために「歌手是中国的有名歌手？」と漢字を並べて聞いたたら、「是」（Yes）とのこと。私は20分ぐらい見て、売店を去り、寄宿舎の自分の部屋へ

中国内モンゴルでの3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

戻った。——もちろん、部屋でこの体験記のメモ（備忘録）を書いていた。——他方、シシカバブ（羊の丸焼き）を食べに星さんの現地の友人のお店に出かけた連中は、後日談ながら、シシカバブを食べた後、負けた者が飲酒するという条件で「トランプ・ゲーム」に興じたそう。まず、各自の勝敗は、徐＝6敗（杯）、添乗員の川元＝10敗、佐々木＝5敗、笠原＝5～6敗＋ビールX本、中村＝7勝2敗、田島＝X敗——<田島さんは「勇敢な」女性であったせいか、リクエストが多く、現地の中国人全員と「勝負」したとのこと>——後藤さんは1敗で逃げたとのこと。特に、笠原君は「これはダメだと思って、自分を守るために、『逃げた』」とのこと。また、彼は現地の中国人から勝負を受けずに、英語で——（中国語が判らなかったので、仕方なく、英語で）——s t o pを連発したが、通じず、10回連続で「勝負」をしてしまった、そう。な。

なお、浜ちゃんは、川元さんがふざけて彼を女性と紹介したためか——<浜ちゃんはロン毛であったため>——中国人からやたら身体（髪）を「さわられ」、さらには「羽交い締め」までされたそう。そのため、彼は、女性が身体を触られること（一種のセクハラ）を嫌がる気持ちが理解できた、と話していた。

さらに、シシカバブにどのような酒が合うかについて、日本酒派の佐々木君とビール派の中村君・川元さんとの間に「論争」があったことも付け加えておく。——<良きにつけ、悪きにつけ、この日の現地住民との「交流」は学生たちに、社会とは机の上で学ぶ様な「きれいな事」では片づけられない不合理な側面を秘めている事を学習した点で大きな収穫と言えよう。——ただし、この教訓

には、「この件を帰国後も忘れない」という前提条件が付くのだが。——さて、どうだろうか。

9月11日（第4日）

〔恩格貝での植林活動—第2日目〕

今日も前日同様に6時30分に起床。植林現場も同じ、作業も同じ。田島さんはマイペース、浜ちゃんと佐々木君そして中村君らは黙々と作業に専念する。浜ちゃんのマリン・ブルーのTシャツは砂漠には映えるが、これでは前日同様に日焼けしそうである。今年の唯一の違いは、水を入れる時、強力な動力ポンプを用いたこと。かなりの水圧があるため、多数の人間でホースを押さえつけなければならない。——このことから、私はウィット・フォージェルの「水支配の論理」を思い出した。やはりアジアでは、大河の水（治水）を支配するために、支配者とその協力者（被支配者）の区別が必要であったことが理解できた。——このホースの先頭者は順番で当たったが、徐さんは楽しそうに水をコントロールしていた。また中間のホースに小さな穴があいており、この穴を押さえようと佐々木君が水を浴びながらも押さえ続けていた。佐々木君、「縁の下での力持ち」的な行動に対して、皆に代わって「有り難う」。12時4分に午前中の作業が終了。昨日の分を含めて、この地に植林した本数は508本に達した。

2時から3時40分まで、再度砂漠ウォッチングへ。小倉さんの解説を聞く。小倉氏曰く。以前（1991～93年）緑の回復モデル地区として有名になった「五里明沙」（ごりめいさ）地区——〔寄宿舎から南に10Kmの地点。その先には、昨年訪れた、沙漠に埋もれる寒村——電気も通っておらず、太陽の動きで人間の行動が規制されていた

徳盛城——が位置している] —は、最近、近くでの道路建設などやこのところの旱魃で地下水の水流・水位が変化し、そのため、水が来なくなり木が枯れはじめている、とのこと〔写真42〕。確かに、緑の森とは言えない。砂が近くまで押し寄せているのが遠くからも見えた。本当に自然のバランスは繊細なものであることを教えられた思いがした。同時に、人間は依然として自然に対して、いかに傲慢であるかも理解できた。自然の摂理を知らないのは私たち人間だけかも。また星さんと徐さんが現地住民と会い、沙漠の「大根」なる植物を教えてもらい、引き抜いてきた〔写真43〕。この沙漠の「大根」を食べさせてもらったが、本当に大根の味がした。「沙漠は不毛な土地」と考えがちであるが、どうやら、そう考えるのは「現場」を知らない人間の無知に由来しているようである。あまりにも無知な自分を再認識した。砂すべりや一人瞑想（浜ちゃんや中村君）して楽しむ学生。浜ちゃん曰く、「自然の音を独り占めすると、こんな感じなんだ」と。日本での時間の流れとは根本的に異なる空間の静寂感を表現したのかも知れないが、一人でも、日本と異質な世界があることを知ってもらえただけでも、このツアーに参加してもらって良かった〔写真44〕。

4時20分に星さんの現地の友人である中国人女性の二男のお店—（ここが、昨日シシカバブを食べたお店）—に到着。星さんがこの店の調理道具を借りて、白玉を作り地元の住民および私たち協力隊が食べることになる。アンコは日本から持って来た缶詰のもの。白玉作りの過程で、田島さんがその「アンコ」をおかずにビールを少しひっかける。これを見た星さん曰く。「これじゃ、お嫁の貰い手がないかも（笑い）」と。酒で思い出したが、

昨日「酒を大量に飲み干し」、そのため体調がすぐれなかった笠原君が砂漠ウォッチングの頃から元氣を取り戻した。若いせいか、回復力が早い。白玉も食べられるようになる。

7時から夕食。今日は恩格貝での最後の夕食のせいか、私の大好きな果物が複数（スイカ・メロン・ハミウリ）食卓に並べられていた。それ以外のメニューはほぼ同じ。夕食後、売店で孟さんから豆を挽いたコーヒーを頂く。この2～3年前には考えられない事であった。どんどん、日本の生活文化が流入している様子が手に取るように分かる。しかし、この日は8～9時の間に3回の停電があり、その度に孟さんがローソクに火をつけてくれた。周りがほんのりと明るく照らしだされて幻想的な、しかも20年ぐらいフラッシュ・バックしたような気分であった。高度な消費生活の導入と1時間に3回もの停電というインフラ面での不備というこのアンバランス。この事実が、いみじくも現在の中国を象徴している様な気がする。このような中国の「辺境」の地にいると「中心部」の矛盾が理解できるという、安田さんの言葉が今更ながら、思い出された。

9月12日（第5日）

〔恩格貝からバスで呼和浩特へ〕

8時24分に恩格貝を出発。ここから呼和浩特までは250km。バスで3～4時間の距離である。まずは包頭まで1時間。バスの車窓から連々と続く陰山（インシャン）〔青山〕山脈を眺めながら。9時27分に包頭市の手前で交通渋滞に巻き込まれる。この原因はトラックが自転車を巻き込んだ人身事故である。その現場に交通整理の警官がいないために、我先に通過すべく、各車両が道

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

を譲らず、さらなる交通渋滞を引き起こす結果になっていた。幸運なことに我々のバスはこの事故現場を10分ぐらいで通過することができた。本当に幸運であった。一般に、中国の道路は整備されず、悪路のため、本当に故障車も多く、しかも道路に平気で放置されている。土地柄なのか、石炭を満載したトラックが多く放置されていた。9時40分によりやく包頭市内に到着。

ここから、高速道路らしきものを通るも、まったくの一般道路。考えてみたら、日本の県庁所在地に当たる呼和浩特(内蒙古自治区の県庁所在地)からの「下り車線」の高速道路は出来上がっていたが、「上り車線」は資金不足で作られてはいない。だから、一般道路を高速道路として料金を徴収して、この金を建設資金に利用しているのである。それでも、「上り車線」もこの時は基礎工事(土台作り)をしていた。2008年のオリンピック招致に照準を合わせて作業をしているのであろうか。やはり、日本人の性急な性格では推し量れない悠長な建設工事である。10時10分に休憩をいれた。多くの近隣農民が道路端で、取り立てのブドウやリンゴを露店販売していた。ここでこれらの果物を購入して、10時20分に再度出発。

12時05分に呼和浩特市に到着。そして、12時32分に「銀燕差面(インウエンツォウミイアン)」店で、饅頭を食べる。私は羊肉差面(辛)を頼む。確かに辛い、美味しい。私たち4人のテーブルには、饅頭が入った大きな丼(どんぶり)3個と小丼が、そして野菜炒めに、自分の味好み用のトッピングが運ばれてきた。そして各自の小丼に分けて、お好みの味で食する。斉藤親子や私も大満足。徐さんも佐々木君も「美味しそう」なポーズで食べているところをパチリ。約1時間を昼食

で費やし、1時34分にこの食堂を出て、ホテルの「金歳大酒店」に1時50分に到着。昨年と同じホテルである。ここで40分寛いでから、2時30分に内蒙古大学を訪問する。ここで、ようやく、私の荷物が減った。というのは、今年、内蒙古大学の学生さんにお土産として「日本の新聞(『読売新聞』の朝・夕刊)を約1ヶ月分持って来ているからである。主任の劉先生が多忙(新しい日本人の日本語教師が来ることになっているとのこと)のため、私が挨拶をした。日本人の学生からは「先生の話は少し長すぎた」とのこと。——私の話を要約すると、日本(人)の良い面しか見ない中国人の見方に警鐘を鳴らすべく、日本にも悪人も沢山いること、良・悪のバランスを取って、日本(人)を見てほしい、という内容であった。中国人学生に分かってもらえたかどうか、すこし不安である。

また内蒙古大学の学生たちは、日本の情報、例えば、サッカーの中田のヨーロッパでの活躍を知っており、「彼はアジア人として立派だ」との事。またシドニー・オリンピックが近づいていたせいもあり、各競技についても話題になった。また、例年の如く、内蒙古大学の運動場では新入生の軍事教練が展開されていた。——女性も男性と並んで、迷彩服を着て、訓練していた。日本の若者と変わらず、過保護に育てられてきているのか、なによい学生もいた。大学生は寮生活が基本であり、アルバイトなどはしていない。と言うより、時間を惜しんで、勉学に傾注している。大学の成績が、即、就職の切り札だからである。最後に、正面玄関で、全員の集合写真を撮る。

なお、参加者16名は以下の如し。

小倉次雄〔団長〕

〔一般参加者〕 斉藤裕美、斉藤友喜、平田京子、

萩原慶次、星恵美子そして私。

〔学生参加者〕田島清美、後藤ゆかり、藤井香野緒、佐々木裕幸、浜崎昭博、中村篤志、笠原祐介、徐京紅(Xu Jinghong)、霞文亮(Hou Wenliang)

おわりに

敬愛大学・国際学部の中国内蒙古・恩格貝（クブチ沙漠）での植林ボランティア活動は、星恵美子さんという好人物にも恵まれて、1998年には学生10名（一般人9名）、'99年には学生18名（一般人4名）そして2000年には学生9名（一般人7名）という参加者で行われた。年によって、参加者数にかなりのバラツキがあるのは、学生の自発性を反映したものであり、ボランティア活動としては「健全」な証拠であろう。参加者の中には、リピーターも多く、特に田島清美さんは在学4年間、毎年参加していた。彼女は、おそらく、その参加を通して、内蒙古の沙漠の寒村の変化を、またその住民の彼女（日本人）に対する対応の変化を観察できたことであろう。また、何よりも1年目（'97年）に植樹して、今のところは順調に成長しているいわば彼女の“分身”の力強さを感じたであろう。その“身長”は優に5mは越えており、優良木に育っていた。またその成長を通して、“自分自身の成長”をも客観的に推し量る“場”を手にしたのではないだろうか。彼女には、できれば卒業後も、恩格貝を訪問してもらいたいものである。ちなみに、植樹した苗木は新疆ポプラである。これは、佐倉キャンパスのグランド沿いの土手に、下村喜一さんのご好意で苗木をいただき、植えてある（この成長は遅く、まだ3～4mである）。

またここ数年、中国人留学生（徐京紅、霞文亮

の両君）の参加もめだつ。彼らは「豊かさ」の追求に汲々としている今の中国の「負の側面」を直視して、何かを感じ取ったにちがいない。

今年も、自省の場として利用していた学生も数名いた。彼ら曰く、「自分の呼吸の音しか聞こえてこない、この沙漠の静寂さを日本に持ちかえりたい」「この静けさは日本とどこか違う」と。これも沙漠と言う大自然（大宇宙）の中では、自分がいかに小さい存在でしかないのかを、理解ないし無意識の内に感じ取った学生の本音であろう。また大学構内（日本）で“普通”の学生が'99年の植林活動では、積極的に動き、同行した年配者への手助けは勿論の事、現地の中国人運転手の手伝いまでしていた。このような学生たちの行動ないしメッセージから、思うに、教員たちも学生の関心が何処にあるのか、ないしは何処に向けられているのかを、正しく把握し、学生にそのような場を提供、ないし補助するサポーターとして立ち回る必要があるのではないだろうか。学生たちは植林ボランティアを介して、「自ら動くことによって、新しい価値を発見する」ことを理解した、と思われる。したがって、国際学部の教員側はそのような学生たちに、次のステップとして、彼らの関心を社会問題と係わらせ、まずは一当たり前だが「社会とは異質で、様々な人々からなる混合体である」という多様な「質」を異にする「異質性」の存在を理解させることができたならば、自ずと、ボランティアを基礎にした社会にリニューアルする能力を学び取ってくれるような気がした（あくまでも私の最見目であるが）。

最後に、国際学部の開設年度（1997年）に入学し、意欲溢れる活動で、今日の中国・内蒙古での沙漠植林活動を引っ張った4年生の学生たち：

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

田島清美、加島貴典、庄司貴美子、佐々木裕幸、徐京紅らの諸君と3年生の中村篤志君に感謝したい。

なお、内蒙古での沙漠植林についての詳しい報告は、私の「中国・内蒙古植林体験記―'98年」同じく「'99年」、同じく「2000年」を参照してほしい。また、私たちが帰国した後（2001年の秋季）、徳生城に電気が灯ったとの便りを聞いた。しかし、どのくらいの家庭が電気を引いて利用しているかは不明である。

（註）

（1）1997年度前期のボランティア活動体験者報告会のメニューは以下の如し（敬称省略）。

5月30日ー下村喜一「モンゴルにおける植林活動」

6月6日ー星恵美子「恩格貝での沙漠植林活動」

6月13日ー神戸信和・河野憲子「博物館での教育ボランティア」

6月20日ー成田美奈子「青年海外協力隊員としての私の経験」

6月27日ー定松栄一「バングラディシュでのシャプラニールの活動」

7月4日ー平田京子「主婦の目から見たラオスの生活とその支援」

また1998年度前期のボランティア活動体験者報告会のメニューは以下の如し（敬称省略）。

6月23日ー常葉勝「ベトナム・ハイフオンのストリート・チルドレン支援」

6月30日ー中村正子「市民運動とは何か？ー市民運動の体験から」

7月7日ー加藤三郎「開発途上国への経済協力ーアルゼンチンの事例」

7月14日ー星恵美子「中国内モンゴルでの植林

活動」

7月21日ー大西純子「ボランティアでできること、やりたいことー出会いとネットワーク」

これらの報告を聞いた学生らに感想文を書かせ、提出させた。このレポートについては後日、報告したいと思っている。

※なお、99年度以降は報告者のマンネリ化（私の人脈の狭さにも一因）で体験者報告会は中止している。

（2）彼女の存在は、すでに山本茂『緑のボランティア・蒙古沙漠をゆく』ビジネス社、1995年で紹介されていた（54頁）。近年では、「21世紀へ、地球みらい」（『福島民友』2000年1月12日）も彼女を紹介している。

（3）『読売新聞』「part 1」は1998年6月11日から連載され、「part 2」は1998年8月8日から連載、そして「part 3」は1998年9月5日から連載されている。

（4）『読売新聞』「part 1」「石炭王国」④（6月14日）および「中国環境報告専門家座談会」（6月17日）

（5）『読売新聞』「part 1」「砂漠化」⑩（6月22日）

（6）『朝日新聞』「中国、自然環境回復へ50年計画」（1999年1月8日）

（7）温暖化防止京都議定書（1997年12月）では、温暖化ガス削減目標を1990年比で、日本6%、アメリカ7%、欧州連合（EU）8%などと定めた。この弾力運用のため、二酸化炭素をそれ程排出していない国からその国の排出権を、先進国が購入して、削減目標を達成することが認められているなど、一部ザル法との批判もある。

（8）定方正毅『中国で環境問題にとりくむ』岩

波新書、2000年9月、70－72頁

参考文献

- ①遠山枉雄『沙漠に緑を』岩波新書、1998年
- ②吉川賢『砂漠化防止への挑戦』中公新書、1998年
- ③上田信『森と緑の中国史』岩波書店、1999年
- ④定方正毅『中国で環境問題にとりくむ』岩波新書、2000年
- ⑤山本茂『緑のボランティア・蒙古沙漠をゆく』ビジネス社、1995年
- ⑥金子郁容『ボランティア－もうひとつの情報社会－』岩波新書、1997年
- ⑦山口寛「植林地について－事例：クブチ砂漠・オンカクバイ緑化基地」2000年2月

※この報告書は、小倉次雄氏から入手した。この場を借りて、山口、小倉の両氏にお礼申し上げる。

- ⑧千葉ケフナ普及連絡協議会に関しては、『読売新聞』（2000年9月21日）の記事「ケフナの迷路開放」を参照のこと。

※最後に、写真については、参加者各位からご協力を仰いだ。ここに、お礼申し上げる。

ABSTRACT

A Report on the Volunteer Tree Planting in the Desert District of Inner Mongolia China, 1998—2000

Takeshi YAMAMOTO

In 1998—2000 I went to the Desert District of Inner Mongolia China with young Keiai University students in order to plant trees there once a year. Our destination is Engebei(恩格貝) near the city of Baotou(包頭) which is about 850 kilometer far from Beijing and is located in the northern Ordos District.

We worked there for three or four days each year in such a way that we first dug the ground in a line and secondarily planted young poplars(新疆楊: *populus alba* var *pyramidalis* Bunge) and finally watered each of them.

This work is simple indeed, but it is very heavy under the high temperatur (35°C). The tree planting is a kind of means against desertification in this district. Our students have appreciated through thier works that the environmental preservation is very important for human being. In this respect, I think that our volunteer tree planting in China also is a kind of means for environmental education.

The number which was taken part in these volunteer is as follows. In 1998 there are 19 persons, of which 10 persons are our Keiai University students. In 1999, 23 persons, of which 19 are our studens, including one overseas student form China. In 2000, 16 persons, of which 9 are our students, including two overseas students form China.